

進撃の巨人～ただ1人の為の力～

ねみネム生活

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

調査兵団の第七分隊特殊部隊隊長のトワ・ボルシエラ。

その実力は人類最強のリヴァイと同格と言われ、人々から期待されている。

普段は、その容姿や性格から聖女とも呼ばれる彼女。

しかし、彼女には何としても叶えたい目的があるようで……

目次

1話	第104期訓練兵	1
2話	天啓の銀聖女	6
3話	悪夢の再演	16
4話	『天啓』	22
5話	隠される代償	31
6話	光明	39
閑話・七夕ss		47
7話	油断	54
8話	超感覚	61
9話	正解を導く力	67
ハロウィンss		74
10話	心に潜む者	81

1話 第104期訓練兵

「貴様は何者だ！」

運動場のような広い空間に一人の男の声が響き渡る。

男の名前はキース・シャーデイス。

前調査兵団団長であり、第104期訓練兵団の教官。

クリスタは訓練兵として、この場に立っていた。

キースによって通過儀礼……名前と目的を言わせそれを強く否定する事を続けていく。

「オイ、貴様……何をやってる？」

キースが敬礼を左手でしてしまったコニー・スプリンガーの頭を締め付けていると、視界の端に一人の少女が芋を頬張っていた。

キースはその少女に問いかけるも、本人は気づいていないのか芋を頬張りながら周りを見渡す。

「貴様だ！貴様に言ってるんだ！何者なんだ、貴様は！」

「んぐっ……！」

驚いた少女は含んでいた芋を急いで飲み込むと、芋を持ったまま敬礼をする。

「ウォール・ローゼ南区、ダウパー村出身！サシヤ・ブラウスです！」

「サシヤ・ブラウス……貴様が右手に持っているものは何だ……？」

「蒸した芋です！調理場に丁度頃合いのものがあつたので、つい！」

「貴様……盗んだのか？何故だ、何故芋を食べた……？」

今まで多くの訓練兵を見てきたキースもサシヤの行動に呆気にとられる。

「冷めてしまつては元も子もないので……今食べるべきだと判断しました」

「いや……分からないな。何故貴様は芋を食べた？」

「……それは何故人は芋を食べるのかと言う話でしょうか？」

キースの質問にサシヤは少し考えて話す。

サシヤの答えに周囲の空気が固まるのをクリスタは感じた。

「……はっ……ちっ……半分、どうぞ」

黙ったままのキースに、何を思ったのかサシヤは芋を割ってキースに渡す。

渡すときに少し考えたり、半分と言いながら4分の1程だったり、サシヤの食い意地が分かる。

「……半……分……？」

戸惑うキースの前でサシヤは満足げな笑みを浮かべた。

その日の夕食の時間。食事の内容はパン1つと野菜が入ったスープだった。

適当に席に着き、同じテーブルのニーナと話をしながら食事を摂る。

たまに、下心丸出しで話しかけてくる男の子達にうんざりしつつも、それを表に出すこと無く笑顔で相手をしていた。

「それにしても巨人ってどんな姿をしてるんだろうね」

クリスタの前で食事を摂っていたニーナが呟く。

「あっちで巨人の話をしてるみたいだよ？」

「そうなの？ちよつと行って来るわ」

クリスタが指差す場所では、シガンシナ区出身だというエレンに、巨人について質問が投げかけられていた。

超大型の巨人、鎧の巨人について聞かれたエレンは見たままを答えしていく。

「そう呼ばれているけど、俺には普通の巨人に見えたな」

「じゃ、じゃあ！普通の巨人は？」

鎧の巨人を普通の巨人に見えたと告げたエレンに、今度は普通の巨人について質問がされる。

「っ……っ！」

先程までの反応と違い、エレンは持っていたスプーンを落とし、口を手で塞いで言葉を失ってしまふ。

「皆、もう質問はよそう。思い出したくないこともあるだろう」

「すまん！色々気になって……」

それを見て、察したマルコが話を終わらせる。

その後、食事の時間の終わりを告げる鐘の音が聞こえ、クリスタは戻ってきたニーナと一緒に片付けを始める。

「あれ？それ食べないの？」

「うん。これはあの子の為に取っておいたの。あんなに走らされてご飯抜きは辛いと思うから」

「（……なんて良い子なのっ……！）……ちよつと待ってね……」

食べずに残しておいたパンを抱えるクリスタに少女は何処からか革袋を取ってくる、その中に水を入れて渡す。

「バレないようにね」

「うん！ありがとう！」

片付けで騒がしくなる中、クリスタはお礼を告げると気づかれないようにそつと、食堂を出ていった。

「あいつ……」

それを見ていた1人の少女がクリスタの後を追って行った。

同じ頃、サシヤは5時間以上にも及ぶ罰走を終え、疲れと空腹で倒れ込む。

「あ、居た。ねえ、だい……」

「っ!？」

「きやあー!」

そんなサシヤにクリスタが近寄っていくと、突然サシヤが起き上がって物凄い勢いでクリスタ目掛けて飛びかかる。

それに驚いたクリスタは悲鳴を上げて尻もちをついてしまう。

クリスタが顔をあげると、四つん這いになり、まるで獣のような声を上げるサシヤ。

「これは……パン!?」

「それだけしか無いけど、取っておいたの!?!」

「や……でも、まず先に水を飲まないと!」

「神様ですか! 貴方が!」

「え? ちよつ……!」

先程のサシヤを見たからか少し引き気味のクリスタ。

そんなクリスタの肩を掴みサシヤは崇めるかのように感謝を告げる。

「おい……何やってんだ、お前ら」

「!?!」

後ろからやって来た少女に声をかけられ、驚く二人。

サシヤはパンを没収されると思ったのか勢いよく頬張る。

「えつと……この子は今まで、ずっと走りっぱなしで……」

「違う、芋女じゃねえ。お前だ。お前……良いことしようとしてるだろ?」

「え……」

「それは芋女の為にやったのか? お前の得た物はその労力に見合ったか?」

少女の質問にクリスタは顔を伏せる。

「労力に見合うとかは分からないけど……これは私がしてあげたいって思ったことだから……例え労力に見合わなくても、これからも私は同じ事をすると思う」

「へえ……思ってたより芯があるのな……まあ、良い。とにかくこいつをベッドまで運ぶぞ」

少し途切れ度切れに答えるクリスタだったが、その目は力強い意志を宿していた。

それを見た少女は納得したのか、パンを食べ終え気絶したサシヤを

抱えあげる。

「貴方もいいことをするの？」

「こいつに貸しを作って恩を着せるためだ。こいつの馬鹿さには期待できる」

そんな少女の行動を見たクリスタの問いかけに、少女は恩を着せるためだと返した。

「ねえ、貴方の名前は？」

そんな少女にクリスタは笑みを浮かべる。

「ユミル。それが私の名前だ」

「私はクリスタ……クリスタ・レンズ。よろしくね、ユミル」

2話 天啓の銀聖女

訓練兵団入団から二日目。

「先ずは貴様らの適性を見る！これが出来ないやつは罠にも使えん！開拓地へ移ってもらう！」

キースが声を上げる。

立体機動の素質を見るための試験。

両側の腰にロープを繋いでぶら下がるだけ。

「ミカサ、凄い！私も頑張らないと！」

クリスタはまったくブレの無いミカサを見て両手を握りしめる。

ミカサの横ではコニーや、サシヤ、ジャンも殆どブレが無くぶら下がっている。

「おい！何をやってる!?!エレン・イエーガー！誰が上体を下にしろと言った？」

キースの怒鳴り声が聞こえ、その方向に視線を向けると、エレンが逆さまになって宙釣りになっていた。

「あはは！あいつへったくそだな！」

「ちよつと、ユミル！笑っちゃ駄目だよ！」

そんなエレンを見てユミルが腹を抱えて笑う。

その後も何度も挑戦するエレンだったが、結局、この日に試験をクリアする事は無かった。

「ハアハア……ミカサみたいにブレないようにしないとイケないのに……もう一回お願い！」

「……何でお前はそこまで頑張る？」

訓練時間の後、クリスタは残って立体機動の訓練をしていた。

クリスタに付き添って残っていたユミルはロープを引き上げながら問う。

「……追いつきたい人が居るから……その人は何時も私を守ってくれて……辛い時は寄り添ってくれて……」

クリスタの足が地面から離れていく。

「でも、その人は自分が苦しいときは……辛い時は隠しちやうの……私には隠しちや駄目って言うのにな。私は、その子が私にしてくれた様に、その子を支えられる様になりたい。苦しんでる時に側に居てあげたい」

徐々にクリスタの体のブレが少なくなっていく。

「でも、その子は私の遙か前を進んでいるから、先ずは隣に立てるようにならなくちゃいけないの！だから、私は頑張るの！」

そう叫ぶクリスタの体は殆どブレが無くなっていた。

夜遅くまで訓練を続けるクリスタを見ていたキースは2年前の事を思い出す。

「トワ・ボルシエラ。貴様は何故、そこまで努力する？」

キースは既に夜が明け始め、薄っすらと明るくなってきた訓練場で、1人で立体機動の訓練をしていたトワに話しかける。

10歳で異例の入団を果たしたトワ。

しかし、入団したばかりのトワはロープを使った立体機動の素質を見るテストで、体勢を保つ事が出来なかった。

キースはそれを見て、適性無しと判断をした。

どれだけ努力した所で彼女は立体機動を使いこなす事は出来ないだろうと。

立体機動を使えなければ巨人とは戦えない。

無理して巨人に食われるよりかは、開拓地で慎ましく暮らす方がいいだろうと考えたキースは、トワを開拓地に送り戻す事に決めた。

「明日……もう一度……お願いします……」

トワに頭を下げてお願いされ、もう一度やらせて現実を見させた方が諦めがつくだろうと、それを了承した。

しかし……

「貴様ら、何をしているっ！」

次の日。

訓練場にやって来たキースは、人溜まりが出来ている事に不思議に思いながら近づいた。

キースを見て、訓練兵達が道を開けていきキースを通す。

「……貴様……何をした……？」

前に出たキースは、腰に付けたロープで宙に浮き、完璧とは言えないまでも体勢を保っているトワを見て驚愕する。

何せ、つい昨日までは姿勢を保つ事も出来ていなかったのだ。

新しく入団した訓練兵達の中で、最も才能が無いと言っても良かった。

しかし、現に目の前に居るトワはたった1日で訓練兵の誰よりも完璧に姿勢を保っていた。

「何も……ただ、頑張っただけ……です……」

「貴様……昨日はいつ寮へ戻った？」

キースは昨日の訓練の後、トワが同期の訓練兵に宙に上げて固定してもらっているのを見た。

今日は食事を抜いて、就眠時間の前に下ろして貰うのだろうと考えていた。

「……う？戻ってない……です……」

さも当たり前前の様に半日以上も続けていたと告げるトワに、キースは二の句を継げない。

何故そこまで努力が出来るのか、何がそこまで目の前の少女を駆り立てるのか。

「それで……どうですか……？」

「あ、ああ……問題無い。修練に励め」

キースは合格を告げられたトワが、喜ぶでもなく安心するでもなく、ただ淡々とその事実をその事実を受けとめた事に言い様もない恐怖を覚える。

まるで、たかが半日休まずに努力した程度の事など、どうでもいいと……そう言っている様で。

それを証明するかのように、トワの努力は異常とも言える程だった。食事は1週間に一度は取っている様だが、睡眠は疲労で倒れた時だ

け。

それも目が覚めたら直ぐに訓練を始めるため僅か3時間程度の休憩しか取っていない。

「キース教官！トワ・ボルシエラが倒れました！」

「またか……」

立体機動の訓練が始まってからは更に酷くなった。

食事も睡眠も取らなくなり、無茶な動きをするせいで何度も診療所送りになった。

そして、今日もまた目が覚めて直ぐに訓練を始めていた。

偶然通りかかり、トワの姿を見つけたキースが話しかける。

「トワ・ボルシエラ。貴様は何故、そこまで努力する？」

トワはゆっくりと顔を上げ、首を傾げる。

「意味が……分からない……です」

「貴様が行っているのは自殺行為だ！立体機動をそんな速さで扱えば人体が耐えきれん！貴様が一体何度死にかけたと思っっている!？」

確かに、訓練兵達が行う訓練も少なからず死の危険がある。

しかし、トワがやっている事は傍から見ても異常の一言。

血を吐き、体が壊れる程のスピードで立体機動を行うために、一体何度、診療所へ運び込まれたか。

「死なない事が約束された訓練なんて、何の意味があります？」

「なんだと!？」

トワは、表情こそ変わらないものの、何時もの眠たそうな声では無く、はつきりとした声で答える。

「私には立体機動の才能が無い」

それはキースも知っている。

適性試験では、ブレが大きい所では無く、ひっくり返る始末。

今までキースが見てきた中でも絶望的なまでに才能は無かった。

「だからと言って、それは私が弱いままでもいい理由なんかにはならない。皆が私より何倍、何十倍の才能があるなら、私は皆より何百倍、何千倍、頑張ればいい」

だから、睡眠の時間も食事の時間も勿体無いし、皆と同じ死ぬ可能

性が少しある程度の訓練は必要無い。

才能が足りないなら文字通り死ぬ気で頑張るだけ。

「後悔なんて一度でいい。私は、私の望む未来を掴むために強くならなくちゃいけない。その為には死ぬ程度の訓練でも生温い」

その後、トワは上層部へ直談判し、その実力を認められ異例の2年で訓練兵団を卒業することになる。

「エレン・イエーガー。覚悟はいいか？」

「はい！」

「始めろ！」

他の訓練兵が見守る中、エレンの二度目の試験が始まった。

ワグナーにより、ロープが巻き上げられエレンの体が徐々に地面から離れていく。

「おお!!」

歓声上がる。

昨日までは全くと行ってバランスを取れなかったエレン。

今日は体が揺れさえすれ見事にバランスを取っていた。

「ああ!!」

「降ろせ」

しかし次の瞬間、エレンの体がブレ、反転してしまう。

誰もがエレンの不合格を確信していた。

しかし……

「ワグナー。イエーガーとベルトの交換をしろ」

「は、はい！」

キースはエレンを降ろしたあと、エレンの後ろに居たワグナーにエレンとベルトを交換するように命令する。

ワグナーはその指示通りに腰からベルトを外すとエレンに手渡す。

「もう一度やってみろ」

言われるままにワグナーから受け取ったベルトを腰につけたエレンに、キースは命じる。

「今度こそー！」

皆が見守る中、再びエレンの足が地面から離れていく。

すると、今度はバランスを保てたまま宙に浮かぶことが出来ていた。

「装備の欠陥だ」

何が何だが分かかっていないエレンに、キースはエレンが着けていたベルトを見せる。

「貴様が使用していたベルトの金具が破損していた。ここが破損するなど聞いたことないが……新たに整備項目に加える必要があるな」

つまり、エレンは壊れた装備で一時的とは言えバランスも保つことが出来ていた。

それを理解した訓練兵達はエレンに称賛の声をかける。

「で、では！ 適正判断は？」

「問題無い。修練に励め！」

それを聞いたエレンは両手を空に突き出し喜びを顕にする。

「何とかなったようだな」

「目で『どうだ』って言ってるよ」

「違う」

アルミンの言葉をミカサが否定する。

アルミン達は首を傾げてミカサを見る。

「これで私と離れずにすんだと思って……安心してる」

そんなミカサの発言にアルミン達は苦笑いを浮かべた。

「あいつとんだだけエレンが好きなんだか……」

「でも、離れたくないっていうミカサの気持ちも分かるかな」

アルミン立ちから少し離れた場所で聞いていたユミルも苦笑いを浮かべる。

クリスタも同じく苦笑いを浮かべていたが、ミカサの気持ちも分かるとユミルに話し、ユミルに苦い顔を浮かべさせた。

そしてそれから3年後。

クリスタ達第104期生は訓練兵を卒業することになった。

「心臓を捧げよ」

「はっ!!」

「本日を持って訓練兵を卒業する諸君らには3つの選択肢がある」

男が話す3つの選択肢。

1つは壁の強化に努め、各街を守る駐屯兵団。

1つは犠牲を覚悟して壁外の巨人領域に挑む調査兵団。

そして、誰もがそれを目指してきた、王の元で民を統制、秩序を守る憲兵団。

「むろん、憲兵団を希望できるのは先程発表した成績上位10名だけだ！」

- 首席 ミカサ・アツカーマン
- 2番 ライナー・ブラウン
- 3番 ベルトルト・フーバー
- 4番 アニ・レオンハート
- 5番 エレン・イエーガー
- 6番 ジャン・キルシュタイン
- 7番 マルコ・ボット
- 8番 コニー・スプリングー
- 9番 サシャ・ブラウス
- 10番 クリスタ・レンズ

「後日、希望する兵科を問う。本日はこれにて『第104期生訓練兵団』解散式を終える！以上!!」

「はっ!!」

「はっ！…(やっとここまで来た!)」

「それで？クリスタは何処に行くんだ？やっぱ、憲兵団か？」

解散式が終わった後、クリスタ達は食堂に集まった。

卒業祝いと言う事で、肉は無いがかなり豪勢な食事になっている。

「ううん。私は調査兵団に行く」

「はあ!?正気か？」

「うん」

「まさか、例の隣に立ちたいってやつの事か？私がそいつの立場だったら安全な所に居て欲しいって思うがな」

調査兵団に入ると話すクリスタに、何とか思い直す様に告げるユミル。

「それでも、私が一緒に居たいの。守られるだけなのは嫌」

「はあ……分かった、分かった」

決意の固いクリスタに、ユミルは手を振りながらため息をつく。

「ねえねえ、何の話をしてるの？」

「ミーナ」

「おい、私のクリスタに近づきすぎだ！」

二人の元に同期であるミーナがやって来てクリスタの横に座る。

ユミルはクリスタとの距離が近いことに怒り、ミーナを無理やり引き剥がす。

「いたた……もう、分かったわよ。それで何の話ししてたの？」

「こいつの想い人の話しさ」

「え!?クリスタ、好きな人が居たの!？」

「ちよっ、ちよっど！声大きいよ！」

驚いたミーナはつい大きな声をあげてしまう。

慌ててクリスタが口を抑えるも、既に聞こえてしまったのか、少年訓練兵の多くが肩を落とす。

「それで！それで!?!その人は誰なの!?!」

「う、うん。トワ・ボルシエラ……その人が私の大切な人」

トワ・ボルシエラ。

何故か10歳で訓練兵団への入団が認められ、2年で特例として卒業を許可された人物。

更には卒業後、調査兵団に入団し、その能力を買われ僅か1年で分隊長の座についたと言う経歴を持つ。

幾つかの二つ名を持つ彼女だが、その中でも彼女の特徴も表し、最も有名なものが……

『天啓の銀聖女』トワ・ボルシエラ」

「なるほどね。好きっていうのは親愛の方なのね。びっくりした」

クリスタの好きな人が女性だった事に友達として好きと言う事なのかと、肩を落としていた男達の顔に光が戻る。

「違うよ」

「え？」

「友達として好きなんじゃなくて、私はトワに恋をしてるの」

ミーナの言葉をクリスタが力強く否定する。

「トワはね、とても可愛いくて……口はちよつと悪いんだけど優しくて……自分のよりも他人を優先しちゃう人で……」

「うんうん……」

「死んだな……周りが……」

顔を赤らめながら話すクリスタをミーナが微笑ましそうに眺め、ユミルは周囲で倒れている男達を見て同情する。

「……それでね……それで……」

「クリスタ？」

「……一緒に居ると……とても、温かいの……」

「……ねえ、ユミル」

「……何だ？」

「可愛すぎる……」

「分かる……」

その日、ユミルとミーナによって、クリスタ愛好会が設立されたの
は言うまでも無い。

3話 悪夢の再演

「ねえ、聞いた？明日、調査兵団が遠征に出発するんだって！任務の前に行ってみない？」

「行く行く！リヴァイ兵長を見てみたいし！」

「トワ分隊長も見てみたいよね！」

解散式の夜。

クリスタが暮らす部屋で、同室の女の子達が調査兵団の話をしていった。

「クリスタはどうする？」

「行く」

「わ、分かった」

ユミルは盛り上がっている同期を見ながらクリスタに聞く。

クリスタはトワを一目見れるかもしれないと、テンションが上がって食い気味に返答してしまい、少しユミルを引かせる事になった。

「来たぞ！調査兵団の主力部隊だ！」

「エルヴィン団長！巨人も蹴散らして下さい！」

「おい、リヴァイ兵士長だ！一人で一個旅団並みの戦力があるってよ！」

「その横に居るのはトワ分隊長じゃないか!？」

「やっぱ、トワ分隊長って可愛いよなあ……」

「ああ……あの眠たそうなのがまたいい……」

「なんて……神聖な……」

クリスタは調査兵団の出発を見送るために門の近くに来ていた。

少しすると、集まっていた民衆が騒がしくなり、クリスタが視線を向けると調査兵団の団長であるエルヴィン・スミスが見えた。

更にその後ろにはリヴァイ兵士長の姿が見え、その横にはハンジ分隊長とトワの姿があった。

「トワ……」

「お！あれがクリスタの愛しの人か……ほお……何て言うか……すげえ可愛いとしか言えないな！」

ユミルはクリスタの視線の先に居る人物を見て、クリスタの好きな人を見たのと、クリスタにも引けを取らない美貌にテンションが上がる。

そして気づく。

「なあ、クリスタ？」

「どうしたの、ユミル？」

「髪型ってどつちが真似たんだ？」

「……」

「ん〜？」

顔を背けるクリスタの顔をユミルはニヤニヤしながら覗き込む。

「……………私……」

「あく、もう！ほんとに可愛いなあ、お前は！」

「ちよっ、ちよっと！止めてよ！」

顔を赤くして呟くクリスタにユミルは感情を抑えられなくなり、クリスタを抱きしめる。

クリスタは逃れようとするがクリスタの力ではユミルを引き剥がす事は出来なかった。

結局、ユミルが満足するまで抱きしめられることになり、クリスタが頬を膨らませる事になった。

「ちっ……うるせえな」

「ふわぁ……」

民衆の歓声に舌打ちをするリヴァイと、その横で眠たそうに欠伸をするトワ。

「皆の羨望の眼差しも、貴方達の性格を知れば幻滅するだろうね」
「ちつ……」

「……あふ……ん？」

リヴァイを挟んでトワと反対側にハンジが近づいてくる。

「おっと、そろそろ着くよ」

調査兵団が門に到着すると、ウォール・マリアに続く外門がゆつくりと開けられていく。

「あの外に巨人達が……今回はどんな巨人に会えるかなあ！奇行種なんか居たらもう最高なんだけどなあ！」

「奇行種ならここに一匹いるがな」

「え!?どこ？」

「ここだ」

リヴァイの言葉に奇行種を探して辺りを見回すハンジ。

リヴァイはハンジに近付いていき、その頭を掴むと自分の方へと向ける。

「……仲、いいね……ふわ……」

そんな二人を横目にトワは気怠そうに欠伸を溢しながら前を見る。

「前進！」

エルヴィンの号令と共に調査兵団は門を通過し、巨人に占拠されたウォール・マリアへ踏み出して行く。

「ソフィ……よろしくね……」

トワは愛馬のソフィにしなだれかかる。

ソフィは何処か呆れながらも仕方が無いなあと言った様子で走り出した。

「おい、クリスタ。本当に調査兵団に入るのか？」

「うん。トワの隣で戦いたくてここまで来たんだから」

「はあ……分かったよ」

クリスタとユミルは調査兵団の出発を見送った後、任務である壁上に設置してある砲台の点検を行っていく。

「それで……いつ告白するんだ？」

「ええええ!?告白なんて……その……」

「可愛くて強い。更に地位もある……早くしないと取られるぞ?」

「で、でも……断られるかもしれないし……その……自信が無いと言
うか……」

「へタレか……」

「うっ……」

顔を赤くしてもじもじするクリスタにユミルは呆れる。

「はあ……じゃあ、帰ってきたらまずはデートに誘ってみろ」

「ど、どうやって誘えばいいかな……?」

「それを私に聞くか?」

クリスタにデートに誘うように提案してみたユミルだが、自分もそう
いった経験が無いため何も案が思いつかない。

「ま、まあ、それは後で考えよう。それより早く終わらせて飯でも食べ
ようぜ」

「ふふっ……」

ユミルは誤魔化すように作業を再開する。

その様子にクリスタが笑みを溢した時……

「きゃああああ!」

「何だ!？」

突如、凄まじい音が響き渡る。

「あ、嘘……門が……」

二人が音の発生した方向に視線を向けると、開閉門に大きな穴が空
いていた。

「クリスタ!一度本部へ向かうぞ!早くしろ!」

呆然と立ち尽くすクリスタをユミルは強引に引張って連れて行っ
た。

「それでは訓練どおりに各般ごと別れ、駐屯兵団の指揮の元、補給支援、情報伝達、巨人の掃討等を行ってもらおう！」

本部に集まった訓練兵達に、駐屯兵団隊長であるキッツ・ヴェールマンが指示を出していく。

「前衛部を駐屯兵団の迎撃班、中衛を支援班が率いる訓練兵団、後衛を駐屯兵団の精鋭班がそれぞれ別受け持つ！」

クリスタやユミルは訓練兵の為、中衛部を引き受けることになる。「また、伝令によると先遣班は既に全滅したとの事だ！」

キッツの話では門で巨人の侵入を阻んでいた兵士達が全員巨人にやられ、既にトロスト区内に巨人が多数侵入してしまったらしい。

5年前のシガンシナ区の様についてまた鎧の巨人が現れ、内門を破ってもおかしくない状況にある。

その情報に集まった訓練兵達に動揺が広がる。

「静粛に！現在は前衛で迎撃中だ！本防衛作戦の目的は一つ！住民の避難が完了するまでウォール・ローゼを死守することである！なお、承知しているであろうが、敵前逃亡は死罪に値いする！皆、心して命を捧げよ！解散!!」

「はっ!!」

解散の合図と共に訓練兵達は一斉に出撃の準備を開始していく。

「何で今日なんだ……明日から内地に行けたら……」

「ううおええ……」

「大丈夫!?!」

そんな中、ジャンは頭を抱えて座り込んでいた。

その近くでは恐怖の余り嘔吐してしまったダズの背中をクリスタが優しく擦っている。

そんなダズの様子を見たジャンは恐怖を拭うように早足でその場

を離れていく。

その途中で、下を向いていた為前から歩いて来ていたエレンとぶつかってしまう。

「どうしたんだ、ジャンー!」

「どうしただど?俺は明日から内地行きだったんだぞ!」

エレンは何時もと様子が違うジャンを腕を掴んで引き止める。

「落ち着け、ジャンー!」

「落ち着いて死に行けっというのか!」

「違う!!思い出せ!俺たちが血反吐を吐いた3年間を!!」

エレンは激昂するジャンの胸倉を掴み、柱に叩きつける。

「3年間……俺たちは何度も死にかけた。実際に死んだやつも居る。逃げ出したやつも、追い出されたやつも。でも、俺たちは生き残った!そうだろ!今日だってきつと生き残れる!」

エレンの言葉は蹲ることしか出来なかった訓練兵達に希望を与える。

「今日生き残って明日内地に行くんだろ!」

そしてそれはジャンにも……

「……くそっ!行くぞダズ!何時までも泣いてんじやねえ!」

ジャンは覚悟を決めたように何時までも泣いて蹲っているダズに声をかけて巨人の討伐へ向かう。

ダズも何とか返事をしながらジャンの後を追っていく。

「クリスタ……私達もそろそろ出撃だ」

「うん……」

そしてクリスタとユミルも同じ班のメンバーであるコニーと共に巨人の元へ向かった。

4話 『天啓』

トロスト区の門が超大型巨人に破壊される数時間前。

トワ達、調査兵団はトロスト区から離れた南にある市街地で巨人達との戦いを繰り広げていた。

「……………これは……………」

「どうかしましたか？トワ分隊長」

そんな中、退屈そうに巨人を討伐していたトワが急に動きを止める。

トワ率いる第七分隊特殊部隊に所属し、副隊長を務める黒髪の少女が、その様子を不思議に思い尋ねた。

「エムブラ……………エルヴィンは何処？」

「エルヴィン団長なら、ここから少し先に行った所に居ますが……………何かありましたか？」

何時もは眠たそうなトワが、真剣な表情を浮かべているのを見て、エムブラと呼ばれた黒髪の少女は気を引き締める。

「……………エルヴィンに伝えて。嫌な予感がする。トロスト区の壁が破られる可能性がある」

「トロスト区が!?!分かりました!直ぐに伝えます!」

トワから告げられた言葉に、エムブラは驚く。

「私は先に帰るから、この隊は任せる。ソフィ、急いで」

「え!?!トワ分隊長!?!」

急いで馬を走らせようとしたエムブラは次に聞こえてきたトワの言葉に驚いて振り返る。

しかし、その時には既にトワはソフィに乗って走り出していた。

「はあ……………まあ、あの人なら大丈夫か」

1人駆けていくトワの背中を見ながら、エムブラは溜息をつくも、直ぐに気持ちを切り替え、エルヴィンの元に向かった。

トワがトロスト区まで戻ってくると、既に門には大きな穴が空いており、多くの巨人が壁内に侵入していた。

「これは……」

立体機動で壁の上に登ったトワは悲惨な光景を目にする。

あちこちから悲鳴が聞こえ、門の駐屯兵団の兵士だと思われる死体が幾つも見つまっている。

壁上から飛び降り、立体機動に移ったトワは、ある人物を探しつつ巨人を討伐しながら真っ直ぐに本部へ向かって進んでいく。

5体目の巨人を討伐した時、トワの耳に少年の叫び声が聞こえた。

「うわああああ!!止めて!止めてください!!」

「……」

急いでその場所へ向かうと、丁度中型の巨人が訓練兵と思われる少年を握りつぶしていた。

更にその近くでは小型の巨人が同じく訓練兵と思われる少女を両手で握りしめ口へ運んでいる。

「死ね」

少年はもう助からないと判断したトワは直ぐに小型の巨人へと目標を定める。

中型を避けながら小型へと迫り、少女の頭が噛みちぎられる前になじを削ぎ落とす。

「無事?」

地面に落ちる寸前で少女を掴み、立体機動で屋根の上に登って少女を下ろす。

外傷も殆ど無く呼吸もしている為、生きているのは分かるが、声をかけても反応が無い。

「気絶してる……それにしても何でこんな前線に訓練兵が?駐屯兵団は何をして……」

そこまで言ったところでトワは気づく。

ここに来るまでに未だに生きている駐屯兵団の兵士を見かけてい

ない事に。

「ん……」

「起きた？」

「……え……トワ、分隊長……？」

トワが顔を顰めていると、気絶していた少女が意識を取り戻す。目を覚ました少女は、トワの姿を見て安心したのか涙を溢す。

「泣いてる暇があるなら、下がって他の隊と合流して」

「隊……あ、ま、待つてください！まだ仲間が居るんです！」

少女は気絶する前に3人の仲間が死んだのは目にしている。

しかし、残りの2人の死は見えていない。

だから、まだ生きている可能性がある。

少女は立ち去ろうとしたトワを引き止め、仲間を助けて欲しいと告げる。

「場所は……」

「エレン！早く!!」

「……っ!？」

トワが、少女から仲間の居場所を聞こうと声をかけた時、離れた所から少年の叫ぶ声が聞こえる。

急いで向かったトワだったが、その場に着いた時には、既に巨人の口が閉じられ、噛みちぎられた腕が地面に向けて落ちていく。

トワは巨人の前で、現実を受け止められずに呆けてしまっている少年を抱えて移動する。

討伐しても良かったのだが、周囲から巨人が集まって来ており、2人に怪我をさせてしまう可能性があった。

「名前は？」

「わ、私はミーナです！この子はアルミンです！」

「そう、ミーナね。アルミンを連れて下がって」

「は、はい！」

ミーナは呆然としたままのアルミンを抱えて後方へ下がっていく。
「次は……あそこか」

トワは2人が離れていくのを確認すると、周囲を見渡し、訓練兵が

巨人に襲われるであろう場所へと向かった。

「リヴァイ」

トワが1人トロスト区へと向かっている時、巨人を討伐したりヴァイの元に、馬に乗ったエルヴィンが駆け寄ってくる。

「何だ？」

「撤退だ」

「撤退？まだ、限界まで進んでねえぞ……仲間は犬死にか！」

リヴァイはこの作戦の為に死んだといった仲間達の犠牲を無駄にするのかと、撤退に反対する。

「トワの勘だ……トロスト区が破られるらしい」

「ちっ……あいつの勘はくそみてえに当たりやがるからな。あいつがそう言うならそうなんだろうよ」

まるで予知の様な異常なまでの勘の良さ。

調査兵団の死亡率が大幅に下がったのも、エルヴィンの考えた新戦術だけで無く、トワの勘も大きく関わっている。

何度も仲間を救ってきたトワの勘は一部の兵士からは神のお告げとも言われている。

故に……『天啓』

だからこそ、リヴァイもトワの勘は信じている。

「撤退の準備が完了次第、トロスト区へ帰還する。リヴァイも補給をしておいてくれ」

「……了解だ」

それから1時間後。

全ての撤退準備を終えた事を確認したエルヴィンは陣形の先頭で兵士たちに号令をかける。

「総員、早急にトロスト区へ帰還せよ！群がる巨人を排除しつつ、外門を目指す！」

そして、帰還する途中、巨人が自分達の事を無視して北上して行くのを見て、エルヴィンはトワの勘が当たった……つまり、トロスト区の壁が破壊された事を確信した。

「ミーナ！アルミン！」

「クリスタ……」

「え!?どうしたの!?!」

トワと別れた後、呆然としたままのアルミンを抱えて移動していたミーナは、クリスタ達の姿を見つけて安堵のあまり泣き出してしまふ。

突然の涙に、クリスタは慌ててミーナを抱きしめ背中を擦る。

「なあ……エレン達は……どこに居るんだ……?」

アルミンとミーナの2人しか居ないことに気づいたコニーが恐る恐ると言った様子で聞く。

「ここに居ないって事は巨人にでも食われたんだろうよ」

「なっ!?まだ、分かんねえだろうが!なあ、ミーナ！」

「っ……」

「嘘だろ……あいつらが……」

コニーは一握りの可能性に賭けてミーナを見るも、ミーナの表情からエレン達が死んだことを悟る。

「それよりも……」

ユミルはアルミンに近づいて行き、その胸ぐらを掴み上げて殴り飛ばす。

「っ……!」

「ユミル!」

「何してんだ!?!」

突然のユミルの行動にクリスタとコニーは驚きながらもユミルを止める。

「お前は一体何してんだ?人一人を抱えて移動するのがどれだけ危険

なことか、知らねえ訳じゃ無いだろ！仲間の死を受け入れられねえ気持は分かるけどな……生きる気がねえなら1人で死ねよ！」

「……ごめん……」

「謝る相手は私じゃ無いだろ」

「ごめん、ミーナ」

「ううん、気にしないで……私は気絶してて皆が食べられる所を見てなかったから何とか動けてるだけで、見てたら私も動けなかったと思うから」

ユミルの言葉にアルミンもやっと正気を取り戻したのか、ミーナに向けて謝罪をする。

アルミンに返したミーナの言葉に、ユミルはふと疑問に思う。

「ん？気絶してたのか？よく生き残れたな」

「運が良かったんだと思うよ。トワ分隊長が居なかったら私はここに居ないと思う」

「トワ分隊長？」

「うん。私とアルミンは巨人に殺されそうだった所をトワ分隊長に助けられたの」

「トワが居るの!？」

「まじか！じゃあ、調査兵団が帰ってきてるのか!？」

トワが居ると言うことを聞いて歓喜するクリスタ達。

「いや……それはねえな」

コニーの言葉をユミルが否定する。

「は？現にミーナがトワ分隊長見たって言ってるだろうが」

「別にトワ分隊長居るってことは疑ってねえが、多分調査兵団は帰ってきて無い。帰ってきてたら私達に撤退の合図が出るはずだ」

巨人殺しの達人である調査兵団が帰ってきているなら、わざわざ実戦経験も無く、足手まといになるだけの訓練兵を戦い続けさせる必要は無い。

さっさと撤退させた方が調査兵団にとっても良いだろう。

しかし、未だに撤退の合図が出るどころか、門から入ってくる巨人の数は増える一方。

「状況を見るに、トワ分隊長は1人で先に帰ってきたみたいだな」

「で、でもよ！トワ分隊長が居るならこの状況も何とかなるよな!？」

「さあな……」

「さあなつて何だよ！」

曖昧な返答を返すユミルにコニーは苛立ちを隠しきれない。

「気づかないのか？かなり前から補給班の奴らを見てねえ。何があつたかは知らねえが、補給出来ずにガスが切れちまえばいくらトワ分隊長と言えど、巨人に太刀打ち出来ないだろ」

ユミルは防衛戦が始まった直後は居た補給班が、今は何処にも居ないことに気づいていた。

ユミルに指摘され、クリスタやコニー達もその事実気づく。

「全滅したのか、それとも逃げたのか……どっちにしる状況は最悪だ……トワ分隊長がそれに気づかないまま補給を当てにしてたら……」
「そんな……」

「つと……悪いな、ちよつと悲観的になっちゃった。まあ、仮にも『天啓』なんて言われてるんだ。気づいて無い訳は無いな！」

「あ、ああ！そうだな！」

雰囲気为重くなるのに気づいたユミルは、わざと明るく振る舞う。

「皆、前進の指示だ」

「……っ！……あ、ああ……」

「クリスタ、行くぞ」

「う、うん……」

そんな中、クリスタ達の班に前進の指示が出る。

「ごめん、迷惑をかけた。僕とミーナは一度後衛と合流する」

「クリスタ……死なないで」

「……ミーナも……また後でね」

アルミンにとミーナの2人と別れたクリスタ達は、指示に従って前へと進んでいく。

「何だ……これ……」

そこでコニー達が見たのは、巨人によって次々と食べられていく同期の姿。

「うわあああ!!いやだあああ!!だれかあああ!!」

「っ!助けないと!」

「待て、クリスタ!間に合わねえ!」

「っ!」

同期が食べられそうになっているのを見て、クリスタが助けに向かおうとするのをユミルが止める。

巨人に上半身を噛み千切られ、血が撒き散らかされる光景にクリスタは思わず口を塞ぐ。

「こんなの……どうすりゃいいんだよ……」

クリスタ、ユミルの2人が立つ家から道を挟んだ反対の家の屋根に立ったコニーは、周囲の光景に呆然と立ち尽くす。

「馬鹿!ぼうつとしてんじゃねえ!」

いつの間にか屋根の上に登ってきていた10メートル級の巨人が、コニーに向けて飛びかかる。

間一髪のでユミルがコニーを抱えて避けるも、勢いの余り屋根の上から転がり落ちていく。

「無事か!」

「す、すまねえ!助かつ……!?!」

「ユミル!コニー!後ろ!」

クリスタの声にユミルが振り向くと、2体の巨人がユミルとコニーの2人を見下ろしていた。

巨人が2人に手を伸ばすのを見て、クリスタが討伐しようと巨人にアンカーを刺して飛び出す。

「駄目だ!クリスタ!」

「……え?」

ユミルが焦ったように叫ぶ。

飛び出したクリスタに向かって、下から巨人が飛びかかる。

「っ……!」

「クリスタアアア!!」

咄嗟にユミルは手に持つブレードで手を切ろうとする。

「やめて」

「っ!？」

手を切る寸前で聞こえた声に、ユミルは勢いよく顔をあげる。すると、クリスタを食べようと飛びかかっていた巨人は、そのうなじを削がれ重力に従って落ちていく。

更に自身を覆っていた影も無くなっていた。

「あれは……自由の翼……」

側に居るコニーが呟く。

2人の視線の先には、自由の翼を意味するマントを羽織り、銀色の髪をたなびかせ、クリスタを横抱きに抱えるトワの姿があった。

5話 隠される代償

「え？トワは1人で帰ったのかい!？」

トロスト区へ帰還する中、ハンジはエルヴィンから話を聞いて驚きの声をあげる。

「ああ、トワがトロスト区へ向かって既に1時間以上が経っている。そろそろ着く頃だろう」

「トワが万全な状態ならともかく、かなり力を使ってる筈だよ？いくらなんでも無茶じゃないかい？」

元々、トワが1人帰還する前に、調査兵団が巨人と戦っていた市街地は、シガンシナ区までの補給拠点にする目的の他に、力を使って疲労しているトワを休ませる場所を作る目的もあった。

しかし、その作戦の途中でトワがトロスト区の異変を予知し帰還したことで、ただ巨人を討伐して余計に疲弊するだけになってしまっていた。

「私が指示したわけでは無いのだが……」

とは言え、別にエルヴィンがトワに帰還の指示をしたわけでは無い。

と言うよりも、エルヴィンもハンジと同じ意見なのだ。

しかし、エルヴィンがエムブラから話を聞いた時には、既にトワが帰って行った後なのだからどうしようも無い。

「だが、1人でもリヴァイやトワ並の戦力が居れば戦局は大きく変わる。被害を可能な限り少なくする事に限れば、トワの取った行動は正しいと言える」

「でも、それでトワが死んだら——」

「黙れ、クソ眼鏡」

「……っ！リヴァイ……」

その時、2人の会話を後ろで聞いていたリヴァイが苛ついた声で、ハンジの言葉を遮る。

「1人でもやる選択をしたのはあいつだ。その結果、あいつが死ぬと

しても、それを俺達に止める権利はねえ」

「それは、そうだけどき……」

「それに……」

そこでリヴァイは一度言葉を切って、ハンジに顔を向ける。

「例え、万全な状態で無かったとして……お前はあいつが死ぬ所を想像できるか？……少なくとも俺は出来ねえな」

「……!!……くくっ……あははっ……!」

「……おい……何がおかしい？」

リヴァイの言葉にハンジは声をあげて笑い出す。

「い、いや……何だかんだ言いつつ、トワの事を一番認めてるのは君なんだなあって」

「……別にあいつの事を信用してるわけじゃねえ……あいつの力を信用してるだけだ」

「素直じゃないねえ……でも、まあ、確かにトワが死ぬのは考えられないね」

意見が一致する2人。

先程で1人で帰ったトワを心配していたハンジも、今ではトワが死ぬわけが無いと安心した表情を浮べている。

「だが、1つ問題がある」

「……代償だな」

「そうだ。使いすぎると気を失うと言った程度だが、巨人との戦いの場において、それは命取りになる。トワもそれは分かっていると思うが……」

「トワの性格上、確実に倒れるまで使うだろうね……」

エルヴィンの話に、リヴァイとハンジも一転して真剣な表情に変わる。

「トワを失うのは避けたい」

「……なら、どうする？」

「……リヴァイ。何人か兵士を率いて先に帰還しろ」

エルヴィンはリヴァイに何人かの精兵を連れて最短距離でトロスト区へと帰還する様に告げる。

それはつまり、トロスト区へと向かう巨人達の中を駆け抜け抜けるという事。

リヴァイが居るとは言え、犠牲が出る可能性は少なからずある。それでもエルヴィンは、その犠牲とトワを天秤にかけて、調査兵团にとつて、ひいては人類にとつてトワを生かす方が有益だと判断した。

「……了解だ」

リヴァイは了承の意を告げると、連れて行く兵士を選ぶために後方へと下がって行つた。

「大丈夫？」

「は、はい……」

「なら下がる」

ミーナとアルミンの2人と別れた後、トワは巨人に捕まりそうになつていた少年を救出していた。

恐怖で座り込む少年を立ち上がらせて後方に下がらせる。

トロスト区に帰還してから体感で凡そ1時間近く。

時々、地面や屋根の上に転がっている兵士からガスとブレードを補給しながら街を飛び回っていた。

「リヴァイ達が帰ってくるまで早くて2時間つてどこか」

1人で帰ってきたトワと違い、多くの人数で帰還する調査兵团は、その進行も遅くなる。

更に言えば、巨人の間を突っ切つて来たトワに比べて、巨人を避けるために迂回する調査兵团の帰りが遅くなるのは必然だろう。

「……っ……い！」

今までの様に、側に転がっている兵士からガスを交換して立ち上がろうとした時、突然トワは頭を抑えて膝をつく。

「はあはあ……せめて……本部を取り返すまで……は……」

トワは痛む頭を抑えながら多くの巨人が群がる本部を見る。

ユミルはトワが補給班の現状に気づくのか危惧していたが、トワは補給班の姿が見えないことや、本部に群がる巨人を見て、既に事態を把握していた。

今は、本部を奪還するために、道中で巨人に襲われる訓練兵達を助けつつ、向かっている所だった。

「……っ!？」

突如、襲う強烈な嫌な予感に、トワは跳ねる様に立ち上がる。

ガスの消費も気にすること無く移動していくその速度は、今までよりも数段速いものだった。

「どん……っ!？」

焦った様子で、何かを探すように辺りを見渡しながら移動していたトワは、建物の崩れる音に視線を向ける。

「居た」

トワの視線の先には、巨人に襲われている3人の訓練兵。

トワはその3人の中にクリスタの姿を見て、無理やり体の向きを変えて迫る。

何か折れる様な音がしたが、今は気にしている暇は無い。

先ずは手前の2体へと向かう。

「クリスタアアアアア!!」

2体の巨人のうなじを削ぎ、勢いのまま一度地面に下りたトワ。

それと同時に、屋根の下に居た小型の巨人が、2人の訓練兵を助けるように飛び出したクリスタへ襲いかかり、クリスタの名前を叫ぶ声が響く。

「大丈夫、間に合う……っ!？」

直ぐにクリスタを助けようと動いたトワは、先程、クリスタの名前を叫んだ少女が手に持つブレードで自身の手を切り裂こうとしているのを見つける。

「やめて」

トワは嫌な予感を覚え、少女の頭上を通り過ぎると同時に制止の声をかける。

驚いたのか、少女は手を止め、トワの嫌な予感も消える。

「死ね」

トワはクリスタを襲う巨人を討伐して、恐怖のせいか目を瞑っていたクリスタを、横抱き……所謂、お姫様抱っこのような形で受け止める。

「無事？」

屋根の上を下りたトワは、目を瞑るクリスタの顔を少しの間だけ愛おしそうに眺め、名残惜しそうに声をかけた。

「……トワ……？」

ふわりと何か温かいものが体を包み込む感覚に、クリスタは瞑っていた目を開く。

「ん……大丈夫そうで……良かった……た……」

「トワ……？どうし……」

それと同時にトワの体から力が抜け、地に向けて倒れていく。

「トワ!? しっかりして! ねえ!」

クリスタが咄嗟にトワの体を支える。

完全に力の抜けたトワに、クリスタは慌てふためく。

「クリスタ! 無事でよか……トワ分隊長!」

「何があったんだ!」

ユミルとコニーの2人が立体機動で屋根を登り、クリスタの元へと駆け寄ってくる。

クリスタの無事に安心した2人だが、倒れているトワの姿を見て驚く。

「分かんないの! 突然倒れて……! ユミル! どうしよう!?! トワが居なくなったら、私……私は……!」

「落ち着け、クリスタ! 助けられるものも助けられなくなる!」

「っ……! ごめん……」

ユミルは焦るクリスタを叱咤し、落ち着かせる。

「……大丈夫だ! 息はしてる! 気絶してるだけだ!」

「っ! 良かった……!」

ユミルがトワの呼吸を確認する。

「一先ず生きていることが分かると、クリスタは腰が抜けたように座り込んだ。」

「だが、どうする？トワ分隊長を抱えては壁を登れねえ」

ユミルは自分達のガス残量を確認して、苦い表情になる。

「今のユミル達には人1人を抱えて登れるだけのガスは残っていない。」

「……トワは置いていけない。だから2人は——」

「まさかとは思うが……先に壁を登れとは言わないよな？」

「——っ!？」

凶星だったのか、ユミルの言葉にクリスタは固まる。

「まさか、私がクリスタを置いて逃げる薄情者だと思われてたとはな……」

「2人に迷惑はかけられないから……」

「なあ……クリスタ。私は……私達は仲間じゃねえのか？」

ユミルはクリスタの肩を掴む。

その顔には何処か悲しそうな表情を浮かべている。

「仲間だよ！仲間が決まってるでしょ！」

「じゃあ！頼れよ！」

「そうだけ、クリスタ！俺達は仲間なんだろう？迷惑をかけるからなんて言っていないで、仲間なら頼ってくれよ」

「っ……い……ユミル……コニー……私はトワを失いたくない

2人の言葉にクリスタは顔を伏せる。

震えて、掠れたような小さな声だったが、2人にはしつかりと聞こえた。

「……助けて……」

「初めからそう言や良いんだよ」

「おう、任せろ！」

クリスタの願いに、ユミルとコニーは笑顔で受け入れる。

「よし！じゃあ、クリスタはトワ分隊長を……コニーと私は道を切り開く」

「クリスタが抱えるのか？俺がお前が抱えるべきじゃ？」

「大丈夫だよ。トワ……びつくりする程軽いから」

「それに、万が一の時に、私とコニーが自由に動ける方がいい」

「……成程な！」

コニーはユミルの考えに納得する。

確かにクリスタがトワを背負えるなら、クリスタより身体能力の高いコニーとユミルが自由に動ける方が、巨人に襲われた場合に対処しやすい。

「ん？あれは、ジャンか!？」

コニーは視線の先にジャン達訓練兵が本部に向かって飛んでいくのを見つける。

「どうやら、本部に突っ込むみたいだな。私達もあれに続くぞ」

リヴァイは選んだ兵士達と共にトロスト区へと向かっていた。

そのメンバーは、トワ班の5人の内4人に加え、リヴァイが直に選んだ兵士である――

ペトラ・ラル

オルオ・ボザド

エルド・ジン

グンタ・シユルツ

の計8人。

そこにリヴァイを入れて9人で行動していた。

ここに居る9人が、調査兵団の中でも精鋭中の精鋭であるため、何とか死傷者が出ていないが、それでも巨人の中を突っ切って来た為、リヴァイ以外の8人は疲労の表情を隠せないでいた。

「死ぬ……」

「これをトワは1人でやったのよね……」

「おい、分隊長をつけろ。上司だぞ？」

「別に私達とトワの仲だから、いいんです〜！」

年下とは言え、上司である分隊長を呼び捨てにするペトラにエルドが苦言を呈する。

この中でも、ペトラとオルオはトワと同じ時に調査兵団に入団した事もあり、トワの事を呼び捨てで呼ぶ仲でもあった。

「てめえら……もうすぐトロスト区が見えてくる。気を引き締めろ」「す、すいません！」

リヴァイに叱られたペトラ達は、直ぐに気を引き締め、戦闘に備える。

「エムブラ……あいつの力の代償を知ってるな？」

「え？は、はい……確か、使いすぎると気絶するでしたかと……」

副隊長としてトワ班を纏めていたエムブラは、ペトラ達を叱り後ろへ下がってきたリヴァイに問いかける。

エムブラは調査兵団に入ってまだ2年。

人類最強であり、兵士長であるリヴァイは緊張する相手であり、エムブラは少し萎縮しながら答える。

「……恐らくだが、あいつは何か隠してやがる。あんな未来予知みてえな人知を超えた力……代償がその程度な筈がねえ……つて言うのが、エルヴィンとハンジの考えだ」

「それはどんな……？」

「さあな……あいつが話さねえ以上、俺達に知る術はねえ」

「兵長！前方から巨人3体が迫ってきます！」

前を走るペトラが巨人の接近を叫ぶ。

「だから、お前はあいつをしつかり見ている」

「は、はい！」

リヴァイはそう言うと、ブレードを抜き、前方から迫る巨人に向けてアンカーを射出した。

6話 光明

くミカサ side く

「ごめんミカサ……エレンは僕を庇って……」

嘘だ……エレンがもう居ないなんて……

そう思ってたアルミンの横に居るミーナに視線を移す。

……ああ、移さなければ良かった……

ミーナの表情を見て、嫌でも現実を突きつけられる。

もう……エレンは……

ズキリと胸が痛む。

「今は感傷的になつてる場合じゃない」

そうアルミンに……いや、自分に言い聞かせる。

そう……今は感傷的になつては駄目……

この胸の痛みを誤魔化すように、私は立ち上がる。

「マルコ。本部に群がる巨人を排除すればガスの補給が出来て皆は壁を登れる。違うかい？」

「あ……ああ、そうだ……し、しかし、いくらお前が居ても、あの数は……」

「できる」

本部を取り返す……それが今の私の役目。

それだけを考えていればいい。

「貴方達は……腕が立たないばかりか……臆病で腰抜けだ……」

「あの数の巨人を1人で相手する気か？」

「戦わなければ勝てない」

この世界は残酷だ……勝者しか生きることが許されない。

敗者の生死は全て勝者に委ねられる。

生きたいなら戦って勝つしか無い。

私はそう告げて飛び出す。

ああ……胸が痛い……大きな穴を開けられたみたいだ……

私は痛みを振り切るようにガスを噴かせる。

「ミカサ!!」

何体目かの巨人を討伐した時、突然、私の体はフツと勢いを失って落ちていく。

……ガスが切れた……

屋根に激突し、勢いのまま地面に転がり落ちていく。

足音と共に巨人が近づいてくる。

これが私の運命なのだろう……実の家族を失い……私を迎い入れてくれた家族も……失った……

……エレン……貴方が居ない世界なんて……もう……

巨人が私に向けて手を伸ばすのを見て、私は目を瞑る。

……いい人生だった……

(戦えー！)

……っ!?

(戦え!!)

「……っ!!」

私は何かに弾かれる様に立ち上がりながら、折れたブレードで巨人の指を切り落としていた。

……何で……体が勝手に……

エレンと過ごした日々が頭の中を駆け巡る。

そうだ……死んでしまったらもう……貴方の事を思い出すことさえ出来ない……

……ごめんなさい……エレン……私はもう……諦めない……

私はブレードを構える。

何としてでも生きるために、私はもう諦めたりなんてしない。

「うあああああ——っ!」

雄叫びを上げた直後、衝撃が襲いかかり、私は吹き飛ばされる。

一体……何が……

顔をあげて、ただひたすらに困惑した。

巨人が巨人を殺していたから。

ただ……困惑と同時に……微かに高揚もした……

その光景は人類の怒りが体現されたように見えたから……

ミカサが落ちていくのを見て、直ぐに助けに向かったアルミンは、巨人の前で立ち尽くしているミカサを見つける。

「ミカサ!!」

急いでミカサを抱えて屋根の上に登る。

「ミカサ!!怪我は!?!」

「……大丈夫」

「アルミン!急いで離れないと!」

アルミンと共にミカサを助けに来たミーナが、前を指さして叫ぶ。

「15メートル級!?!急いで離れないと!」

「待って……あの巨人は……」

「……え?」

2体の15メートル級の巨人が近くに居るのを見て、アルミンは直ぐに離れようとする。

しかし、片方の巨人がまるで目の前の巨人を相手にするかのよう拳を構えたのを見て、アルミンとミーナは困惑する。

「何……あの巨人……?」

ミーナが呟いた直後、構えていた巨人が拳を振り抜き、千切れた巨人の頭がアルミン達に向かって飛んでくる。

「伏せて!」

「っ!?!」

「きゃあ!」

ミカサは咄嗟に2人を押し倒す。

「……え?……弱点を理解して殺したのか……?」

間一髪避けた3人は、顔をあげて更に驚く事になる。

巨人はうなじを削ぎ落とさない限り、頭を吹き飛ばされた位では死なない。

頭を吹き飛ばした巨人は、まるでそれを理解しているかの様に、立

ち上がろうとする巨人のうなじを踏み潰した。

「そ、そんな事より！早く移動しないと！」

「待って！ミカサのガスが空なんだ！」

「え!?ど、どうするの!?ミカサが居ないと本部を取り返すなんて……」

「そんなの決まってる！ミカサ、僕のガスを使ってくれ!!」

「アルミン!?それは……」

「皆を助けるには僕よりもミカサが必要なんだ！」

アルミンは自身の立体機動装置から、全てのブレードとガスを取り出し、ミカサの物と交換する。

「でも……これだけは残して欲しい……生きたまま食われるのは……やっぱり嫌だからさ……」

そう言つて、ミカサの持っていた折れたブレードを手取る。

「……え?」

「アルミンを置いていったりはしない」

しかし、そのブレードはミカサによって奪われ、地面に捨てられる。

「そ、そんな……」

アルミンは地面に落ちていくブレードを見て、絶望した様な表情でミカサを見上げる。

「ここに置いていたりはしない」

「……でも……」

「でもじゃ無い。アルミンを見捨てては行かない。強引にでも連れて行く」

「待ってミカサ！」

「……何?」

強引にアルミンを抱えようとするミカサに、ミーナが待ったをかける。

ミカサはアルミンを連れて行くことを反対するのかと鋭い視線をミーナに向ける。

「アルミンは私が抱えるよ。ミカサは自由に動ける方がいい」

「分かった」

1人で巨人を討伐する力が無いミーナより、ミカサの方が自由に動

けたほうがいい。

ミーナの意見にミカサも納得し、目つきを元に戻してアルミンを渡す。

アルミンは何とか自分を置いて行かせようとするも、2人は断固としてそれを拒否する。

「……待つて2人共！」

「置いてけと言う話は聞かない」

「提案があるんだ！やるのは2人だから、2人に決めて欲しい！」

ならばと、何かこの戦況を変える手段は無いかと辺りを見渡し、1つの作戦を思いついた。

「もしかしたら、この状況を何とか出来るかもしれない」

「うおおおおお!!危ねえ!!」

クリスタ達は本部へ突撃する一団からかなり遅れながら移動していた。

「良い罠だ！クリスタ、今の内に行くぞ！」

「え!?!」

「おい!?!」

巨人がコニーに気を取られている隙に、ユミルはクリスタを引っ張って通り過ぎる。

ユミルの言い草に、コニーは文句を言いつつも巨人の腕を躲してユミル達に追いつく。

「てめえ……人を罠にしやがって」

「……お前なら大丈夫だと思っただけだ」

「そ、そうか……信頼してくれてたってことか……それなら悪い気はしねえな」

追いついた当初は、ユミルに文句を言っていたコニーだったが、ユミルの言葉にすっかり気分を良くする。

「どうする?」

「行くしかねえだろ。どのみち残りのガスじゃ、迂回してる暇はねえしな」

立ち止まるクリスタ達の視線の先には、丁度、訓練兵達を捕食し終えた巨人が3体。

出来ることなら、気づかれない様に迂回したいが、かなり遠回りをする事になるため、残りのガス量では難しい。

「クリスター・ユミル!」

「コニー!」

2人では心元無いと思いつつも、仕方が無いと覚悟を決めたクリスタ達の元に、聞き覚えのある声が聞こえる。

振り向くと、ミカサ、アルミン、ミーナの姿が見える。

「皆、無事だったんだね!」

「……アルミン……お前……」

「……言わないで……」

「普通は逆だろ……」

「……」

ユミルは、ミーナに抱えられるアルミンを見て、つい言葉が漏れる。アルミンも気にしていたのか、ユミルの言葉に顔を覆ってしまう。

「アルミン……今は恥ずかしがってる暇は無い」

「……分かってる。3人に協力して欲しい事があるんだ」

ミカサの言葉に、アルミンは気持ちを切り替えると、クリスタ達に作戦を話す。

「はあ!?あの巨人を本部まで誘導するって……本気か!」

「うん。どのみち、僕たちが本部に辿り着けても、巨人に侵入されたらガスを交換出来ない。でも、あの巨人は僕たちを襲わないし、並の巨人より強いから、上手く誘導出来ればガスを交換するまでの時間を稼いでくれると思う」

「つまり、あの巨人を本部まで誘導出来れば安全にガスを交換出来るって訳だな」

アルミンの作戦に一度は正気かと疑ったコニーだが、説明を聞いて

納得する。

「しかしよお、あの巨人は一体何なんだ？」

「奇行種と言うしか無いんじゃない？」

「……奇行種……ねえ……」

ミーナの言葉に、ユミルは話の巨人が3体の巨人を圧倒するのを見ながら、誰にも聞こえない位小さな声で呟く。

「ねえ……クリスタが背負ってる人って……」

「トワ分隊長だ。生きてはいるが、意識が戻らねえ」

クリスタに背負われるトワの姿を見て心配するミーナに、ユミルはアルミン達と別れた後の出来事を話す。

「そっか……出来ればトワ分隊長にも力を借りたかったんだけど……」

「それは駄目」

そう呟くアルミンに、クリスタが即座に反応する。

「トワはもう限界……我儘って言われるかもしれないけど、私はこれ以上、トワに無茶させたくない」

それは、いつも笑顔で優しいクリスタでは無い。

例えば、アルミン達を敵に回しても自分の意志を貫く、という覚悟を感じさせる。

「……まあ、気絶するまで無理をして私らを助けてくれたんだ。これ以上を期待するのは酷だろ？」

「……そうだね。僕もトワ分隊長に救われた身だから、恩人に無茶はして欲しく無いか」

アルミンもトワに救われた身なので、ユミルの言うことも理解できる。

それに、元々はミカサが1人でする予定だったのだ。

アルミンは、コニーとユミルが協力してくれるだけでも幸運だと考える。

「話を戻そう」

アルミンは作戦に話を戻す。

巨人を殺す奇行種。

それは近くの巨人に引き寄せられる様に移動している。

だから、近くの巨人を倒していけば、本部まで誘導する事も可能なのでは無いかと考える。

「3人には負担を強いることになるけど……」

「任せて」

「気にすんな！」

「……まあ、クリスタのためだしな」

申し訳無さそうに告げるアルミンに、3人は気にするなどと言って立
体機動に移る。

「さあ、アルミン！行くよ！」

クリスタとミーナも、それぞれトワとアルミンを抱えて3人の後に
続いた。

「ミーナ、やっぱり僕が抱えた方が……せ、せめて背中に……何でも無
いよ……」

閑話・七夕SS

それはトワがまだ分隊長に任命されて間もない頃。

「トワ〜！居るかい？」

「……ハンジさん……？」

トワが1人、立体機動を使った訓練をしていると、突然、自身を呼ぶハンジの声が聞こえる。

トワは何かあったのかと、訓練を切り上げハンジの元へと向かう。

「……ハンジさん……何かあった……？」

「ハンジでいいって！それより、これを見てくれ！」

そう言つて、ハンジは抱えていた物をトワに見せる。

「……笹……？」

「そう！昨日、取ってきたんだ！立派だろ？」

「はあ……それで……？」

確かに大きくて立派な笹だが、トワとしてはそれがどうしたのかと疑問に思う。

「今日がなんの日か忘れたのかい？年に一度の七夕の日だよ！だから、今日は皆でこの短冊に願い事を書こうって話になったんだけど……」

「お疲れ様……」

「つて、何処行くんだい!？」

「……嫌な予感がするから……私はいい……」

ふと、嫌な予感を覚えたトワは、話の途中でハンジに背を向けて立ち去ろうとする。

それに気づいたハンジが慌ててトワを止める。

「ふふふ……流石に勘がいいね。実は、願い事を書くにあたってちよつとした宴会をしようって話にもなつて……ああ、つて言つてもそんなに豪華なものじゃないんだけど……そこで、流石に華が無いんじゃないかって話になつてね」

「まさか……」

「そのまさかだよ！私達で着物を着ようって事になったんだ！」
「私達って……」

「調査兵団幹部……つまりは分隊長以上のメンバーだね！」
ハンジの言葉に、トワはとても嫌そうな表情を浮かべる。

「……リヴァイも……やるの？」

「リヴァイは呼び捨てで呼ぶ事は置いといて……もちろんだとも！」

「そんな性格じゃ無いと思うけど……」

「エルヴィンが命令したら渋々だったけど、了承してくれたよ」
「くっ……」

リヴァイがやらないなら、自分もやらなくて済む理由が出来ると考えたが、当てが外れる。

「……そもそも……着物はどうやって用意するの？」

分隊長以上のメンバーとなると、調査兵団には9人存在する。

その全員に着物を用意する余裕は財源的に無いはず。

「それは大丈夫！エレノアちゃんが宣伝の為に町中を歩く事を条件に無償で貸してくれたよ」

エレノア・コレクト。

一年前、トワが調査兵団に入って直ぐに立ち上げた『シエラ商会』の副会長を務め、余り顔を出さないトワを除けば実質的に一番上の役職に就く人物である。

スラム街出身であり、行き倒れていた所をトワに救われ、その活発的なアイデアを出す才能を買われ、トワの元で働く事となった。

「……聞いてない……何かしてるとは思ったけど……商会は全て任せてるし……嫌な予感もしなかったけど……」

まさか自身の商会が関わっている上に、自分には何も聞かされていなかった事に少し落ち込むトワ。

「そうだ……これ、エレノアちゃんから預かってたんだ」
「手紙……っ？」

ふとハンジが思い出ししかの様に懐から一枚の手紙を取り出す。

トワはそれを受け取ると封を開け、中を確かめる。

『会長へ。恐らくとても嫌な表情を浮かべていらっしやるとは思いま

すが、これもシエラ商會を大きくするために必要な事です。諦めて着てください』

「はあ……分かった……着る……着ればいいんでしょ」

トワは手紙を見て、諦めた様子で呟く。

「てつきり、もう少し抵抗すると思ったんだけど」

「……ん」

トワが了承したのが意外だったのか、驚いた様子のハンジ。

そんなハンジにトワは手紙を渡す。

「……なるほどね〜！いや〜、愛されてるねえ〜！」

ハンジはトワから受け取った手紙、その後ろの方に書かれた言葉を見て納得した。

『……本音を言えば、宣伝とかは別にどうでもいいんです。出来れば、会長にも普通の女の子としての時間を過ごして欲しいと……烏澁がましくもそう思っています。勝手な事をした処罰はきちんと受けるつもりです。どうか、全てを忘れて今日と言う日を楽しんでいただきたいと……そう心から願っています』

「ハンジ、早く……行く……宣伝するなら今から行くべき……」

「おや？宣伝はしなくてもいいらしいけど？」

「どうせ着るなら……宣伝もした方がいい」

「じゃあ、これから食材の買い出しもしなくちゃいけないかったし、時間はかかっちゃうけど、どうせなら皆で着物着て行くことにしよう！」
「くっ……仕方無い……」

「……疲れた……」

「いや〜、凄い盛り上がった！特にトワとリヴァイなんて凄い人気だったね」

宴会も終わった後、トワとハンジ達は着物から何時もの服装に着替えて、地面に突き立てられた笹の前に居た。

ハンジの言うとおり、着物を着て町中を歩くトワ達は、民衆の目を

惹いた。

特に、トワとリヴァイはお互い異性の目をかなり惹くことになり、精神的にかなり疲れていた。

それでも、トワは着物を来たことに不思議と後悔は無かった。

「そう言えば、トワは何を書いたんだい？」

トワが短冊を笹に括りつけていると、トワの願いを気になったのかハンジが問いかける。

「……別に普通のこと……」

『ヒストリアが幸せになれますように』……ヒストリアって子がトワの大切な人なのかい？」

「……そう」

「ほお……トワはこう言った話は余り興味無いかと思ってたけど……いやあく、若いつていいねえ」

「そう言うハンジは何を書いたの？」

ニヤニヤするハンジに、トワは話題を変えようと、ハンジの願いについて聞いた。

「私かい？私は『巨人をたくさん捕まえますように』って書いたさ！」

「……ハンジらしい……」

時を同じくして、クリスタは自室で短冊に願い事を書いていた。

「お、クリスタ。願い事を書いているのか？」

丁度書き終わったタイミングで、扉が開き、同部屋のメンバーの1人であるユミルが入ってくる。

「うん。笹は無いから短冊に書くだけなんだけどね」

「へえ……ちなみに何を書いたんだ？」

「トワが幸せになりますように」

「意外だな。てつきり、皆が幸せになりますようにって書くもんだと思ってたが……」

「確かに昔の私ならそう書いてたかも。でも、私の大切な人は決まってるの。……あ、皆が大切じゃないって言ってるわけじゃないんだよ？ただ、1番は決まってるってだけで……」

「焦らなくても分かってるって」

その時、再び扉が開き、サシヤが入ってくる。

「クリスタ、ユミル？何をしてるんですか？はっ!?もしかしてお肉を隠し持ってるのか!?貸してください！教官に見つかったら大変です！私が隠しておきます！」

「お前は自分が食べたいだけだろ」

「あはは……ごめんね、サシヤ。お肉は無いんだ。実はね——」

欲、丸出しのサシヤに、ユミルは呆れ、クリスタは苦笑しながら説明する。

「成程！そう言えば今日は七夕の日でしたね！それならクリスタ、まだ短冊は残ってますか？」

「え？うん。まだ何枚があるよ？」

「ミカサ達も呼んで、皆で願い事を書くのもいいかと思っただけです。あ、もちろん、クリスタが良かったらですけど……」

「もちろん良いよ！その方が楽しいもんね！」

「良かったです！それじゃあ、皆を呼んできますね！」

クリスタから話を聞いて、今日が七夕だと思い出したサシヤは、皆も呼んで一緒に書こうと提案する。

クリスタの許可を貰ったサシヤは急いで皆を呼びに飛び出していった。

それから少しして、サシヤがミカサ達を連れて戻って来る。

「ミカサは何を書いたの？」

「……『エレンが幸せになれるように』って」

「ミカサらしいね」

「ミーナは？」

「私は『みんなが笑顔でいられますように』かな」

「ミーナは優しい」

「私は『お腹いっぱいお肉を食べたい』って書きました！」

「お前はブレねえな」

「そう言うユミルは何て書いたんですか？」

「私か？そんなもん決まってるだろ。『クリスタが幸せになれますように』だ」

「だと、思いましたよ！」

「アニは何て書いたの？」

「……別に『普通の女の子になりたい』って書いただけ」

「普通の女の子……かぁ。普通って何なんだろうね。私は今のアニも好きだけど」

「なっ!？」

「そう褒められたら、照れて赤くなる所とかも可愛いよね」

「っ……!も、もういいから！」

各々が短冊に願いを書き終えた時、サシヤが窓の外を指さして声をあげる。

「皆さん！窓の外を見てください！流れ星ですよ！」

「……綺麗」

窓の外を見ると、いくつもの流れ星が空を駆けていく。

「お肉をたくさん食べれますようにお肉をたくさん食べれますようにお肉をたくさん食べれますように……」

隣で願い事を一心不乱に呟くサシヤに苦笑しながらも、クリスタも空を駆ける流れ星を見ながら、流れ星に願いをかけた。

(トワが幸せになれますように)

「お！トワ、流れ星だよ！願い事をしないと！巨人をたくさん捕まえられるように巨人をたくさん捕まえられるように巨人をたくさん捕まえられるように……」

ハンジは空を駆ける流れ星を見ると、直様自身の願いを繰り返し呟く。

そんなハンジの横で、トワもまた、流れ星に願いをかけた。
(ヒストリアが幸せになりますように)

7話 油断

「お前らは……補給の班だよな……？」

補給所に飛び込んだジャンは、机の下に隠れて震えている補給班のメンバーを見つけると、机の下から引きずり出して殴り飛ばす。

「よせージャンー！」

直ぐに近くに居たマルコがジャンを羽交い締めにして止める。

「こいつらだ！俺たちを見捨てやがったのは！てめえらのせいで余計に人が死んでんだぞ！」

「補給所に巨人が入って来たの！どうしようも無かったの！」

「それを何とかすんのがお前らの仕事だろうが！」

補給班と言い争うジャン。

補給が出来ずに、ガスが切れたせいで死んでいった仲間達を見てきたジャンは、理由があつたにせよ任務を放棄した補給班を許せなかつた。

「ん？何の音——っ!?伏せろ!!」

そんな中、ライナーが何かの音を捉えた。

窓の外を見て、直ぐに床に伏せるように叫ぶ。

次の瞬間、壁が破壊され近くに居た兵士が吹き飛ばされる。

「しまった……人が集中し過ぎた……！」

ジャンが壊れた壁へ視線を向けると、2体の巨人が中を覗き込んでいた。

巨人は人が多く集まる場所に向かう傾向がある。

そして今、補給所には多くの兵士が集まって居り、周囲の巨人を引き付けてしまっていた。

「うわああああ!!」

「ミカサは何処に居るんだよ!」

「とつくにガス切れで巨人に食われてるよっ!!」

突然巨人に壁を壊された事で混沌とする本部内。

「普通に考えれば分かる……こんなでけえやつに……勝てるわけが

ねえことくらい」

ジャンはいつの間にか、抜こうとしていたブレードから手を離していた。

「アルミン次は!？」

「ミカサは右の2体を！・コニーとユミルは左の1体をお願い！正面は無視で！」

「分かった」

ジャン達が本部に到達する少し前。

アルミン達は奇行種を誘導するために、近くの本部の方向に居る巨人以外を討伐していた。

「よし！食いついた！」

アルミンの作戦の通り、奇行種は目の前の巨人を見つけ、叫び声をあげながら突進する。

「この調子なら何とか皆のガスも持ちそうだ」

ゆつくりとだが、着実と本部へと向かって行く奇行種に、アルミンはほつと息を吐いた。

アルミンの見立てに、他の者たちも安心した様な表情を浮かべる。

……そう、作戦の成功を目の前に気を抜いてしまったのだ。

「きやあっ!!」

「クリスタ!!」

クリスタが1つの家の前を通り過ぎようとした時、凡そ6〜7級の巨人が勢いよく家を破壊して飛び出してくる。

大型の巨人と小型の巨人。

単純な強さであれば、大型の巨人の方が上だが、厄介さに限れば小型の巨人の方が上だと巨人と戦った事のある兵士は言う。

大型の巨人に比べ、動きが速く、うなじが狭いため狙いにくい。

更に、市街地など建物が多い場所であればその小柄さから見つけにくく、突然目の前に現れ、対処出来ないままやられると言った事も多い。

屋根の上に居れば、届かない小型の巨人は無視して、手の届く大型の巨人にだけ気をつけなければいいと考える者も居る。

しかし、今、小型の巨人が家を破壊して現れたように、小型の巨人にも家の1つ破壊できる位の力はある。

つまり、小型の巨人相手だとしても、屋根の上が絶対に安全とは言い切れないのである。

そのため、巨人と戦う事の多い、調査兵团では、何処に居るか見つけやすい大型の巨人より、見つけにくい小型の巨人の方が厄介だと言われている。

く閑話休題く

破壊された家の破片がクリスタを襲い、反応出来なかったクリスタに直撃する。

幸いにも破片も小さく、そこまで勢い良くぶつかった訳では無かった。

そのため、大きな怪我を負うことは無かったが、バランスを崩したクリスタは、地面に向けて落下していく。

「っ……い！」

クリスタは地面にぶつかる寸前、咄嗟にトワを庇うように抱きしめる。

「ぐうっ！ケホッ…ケホッ…ハア…ハア…トワは……」

衝撃にクリスタは咳き込みながらも、何とか顔を上げてトワを探す。

「トワっ!!」

少し離れた所に、トワが転がっているのを見つける。

落下した事による怪我は無い様で安心したのも束の間、巨人がトワに手を伸ばすのを見て、クリスタは痛みも忘れて駆け出す。

「っ！早く逃げないと…っ!?何で!？」

間一髪の所で、クリスタはトワを抱えて転がる様に巨人の手から逃れる。

直ぐにトワを抱え直し、立体機動に移ろうとしたが、落下した時に壊れたのか、立体機動装置が上手く動かない。

「クリスタ！避ける!!」

「きゃあっ!?!」

ユミルの言葉に顔を上げると、巨人が手を振り上げていた。

咄嗟に横に飛び、直撃を避けるも、風圧によつて吹き飛ばされ、勢い良く転がっていく。

「っ…………あ…………」

頭から血を流しながら顔を上げたクリスタは、地面を這いながらトワの元に近づいていく。

「…………ハア…………ハア……………トワ…………」

後少しの距離まで近づいたクリスタはトワに向けて弱々しく手を伸ばす。

「…………あ…………」

しかし、足音を響かせて巨人がクリスタの側に近づいてくる。

そして、無情にもクリスタの目の前に立ち塞がり、クリスタに向けてその手を伸ばした。

「…………わっ…………」

「大丈夫!?!」

馬に乗っていたトワは、暴れる馬に振り落とされる。

痛みに顔を顰めるトワの元に、金髪の少女が馬に乗って駆け寄ってくる。

「大丈夫…………」

少女は少し後ろに体をずらし、馬の上からトワに手を伸ばす。

トワがその手を借りて馬に乗ろうとすると、それを嫌がるかの様に馬が暴れ出す。

「少しだけでいいから、トワと一緒に乗りたいの…………駄目?」

少女が優しく馬を撫でてそうお願いすると、暴れていた馬が仕方が無いなあと言った様子で大人しくなる。

「今日も駄目だったみたいね」

トワが金髪の少女の手を借りて馬に乗った時、黒髪の少女が苦笑しながら馬に乗って2人に近づいてくる。

「……動物に好かれるの……少し羨ましい……」

「トワって何故か動物に嫌われるよね」

「……何で嬉しそう？」

「えく？秘密く！」

「むう……」

何故か、トワが馬に乗れないことに嬉しそうな表情を浮かべる金髪の少女にトワは不思議に思う。

「トワの役に立ってるのが嬉しいのよ。それにトワが落ちないようにするって口実でトワを抱き締める事ができるもんね」

「お姉ちゃん!？」

「……そうなの……?？」

「あう……」

トワがはぐらかされ、不満げな表情を浮かべていると、黒髪の少女がその理由を説明してくれる。

その瞬間、金髪の少女は顔を真っ赤にしてトワの背中に顔を埋める。

「別に……口実が無くて……気にしないのに……」

「ほんと!？」

「うん……」

「何時でも!？」

「う、うん……」

トワの返答に、金髪の少女は嬉しそうにトワのお腹に手を回す。

「えへへ……」

幸せそうな少女を見て、トワも少し嬉しくなった。

「……疲れた……」

「初めて出来た友達だしね、トワと一緒に居るのが本当に幸せなんだ

よ」

木の下で休んでいたトワの横に黒髪の少女が腰を下ろす。

「まあ……あの子がトワに向ける想いは友達の枠を超えてるけどね」

「……何か言った……？」

「秘密。こればかりは2人の問題だからね」

「……2人とも秘密ばっか……」

トワが不満な表情を浮かべるも、少女はどこ吹く風で話そうとはしない。

その様子にとワも諦めて前を向く。

「ねえ、トワ。私が居なくなったらあの子の事、お願いね」

それから、何を話すでもなく、2人は馬に乗って遊ぶ金髪の少女を眺めていた。

少しして突然、少女は先程までと打って変わって、真剣な表情を浮かべてトワを見る。

「……言われなくても……絶対に死なせない……」

「うくん……その答えだと及第点だね」

「……及第点……？」

トワの返答に納得いかなかったのか、少女は及第点だと告げる。

トワはその意味が分からず、少女に問いかけようとした。

「もう、お姉ちゃん！トワは私のだからね！とっちゃ駄目！」

「分かってるよ！もう、怒った顔も可愛いなあ〜！」

「あはははっ！もう、お姉ちゃん！くすぐりたいよ〜！」

その時、木の下で休む2人を見て、金髪の少女が少し不満な顔で近づいてくる。

「ちゃんと正解を見つけてね。トワなら出来ると信じてるから」

「……どう言う……」

トワは遠ざかっていく2人を少しの間、呆然と見つめた後、答えの出ない考えを止めて立ち上がる。

「……行かないと」

そして、2人とは逆の方向へと歩いていく。

「5年ぶりだね」

柵から出た次の瞬間、2人の姿が消えて視界が切り替わる。
「……アウラ」

星が煌めく世界。

そこにトワと同じ銀色の髪を持つ少女が居た。

8話 超感覚

「5年ぶりだね」

「……アウラ」

トワの前に立つのは、トワと同じ銀髪銀眼の少女。

「……その力は使いすぎちゃ駄目だって言ったのに……じゃないと……」

アウラはトワを見て、悲しそうな表情になり、視線でトワの後ろを示す。

「貴方の心が先に壊れてしまう」

トワはそれに従い振り向く。

代わり映えの無い、星が煌めく世界が続いている……筈だった。

「……崩れてる……?」

トワの視線の先、遙か遠くの世界の端とも言える場所は、まるでガラスが割れるかの様に崩れ落ち続けており、その先は何も見えない暗闇が広がっていた。

「ここは貴方の精神世界。ここが崩れると言う事は、貴方の心が壊れると言う事と同じ。だけど、貴方がその力を使う度にこの世界は大きく崩れてしまう。だから……」

アウラは真剣な表情でトワを見る。

「調査兵団を辞めて」

「クリスタ!!っ……邪魔するな!!」

「くっ……!!」

立体機動装置の壊れたクリスタに巨人が手を伸ばすのを見て、咄嗟にミカサとユミルが動く。

だが、相対する巨人に邪魔され、向かうことが出来ない。

「トワ……」

巨人の手が眼前に迫るクリスタの口からトワの名前が溢れる。トワを庇い、無防備に落下したことに加え、吹き飛ばされた事による衝撃に体は満足に動かない。

——死——

ふと、クリスタはその言葉が頭に浮かんだ。しかし……

「……諦めて……たまる、もんか……！」

クリスタは唇を噛み締めて立ち上がる。

ここで死んだら二度とトワに会えなくなる。

いや、それよりも、今この巨人は自分に意識が向いている。

じゃあ、自分が死んでしまえば次は誰に……

そんなの決まっている。

それだけは認められない……それだけは嫌だ！

「っう……！」

痛みに顔を顰めながら、それでもブレードを向けて巨人を見据える。

「……トワは諦めなかった……あの日、あの絶望的な状況で、私を助けるためにたった1人で……！私は誓ったの……そんなトワを支えられるように……今度こそ絶対に1人にしないように……ここで諦めたら、私は、トワの横に立つ資格なんて無い！」

クリスタは自分を奮い立たせる様に叫ぶ。

「ああああああ!!」

クリスタは迫る巨人の指を切り落とす。

巨人はその手を見て、まるで怒ったように叫び、もう片方の手でクリスタを弾き飛ばす。

「あぐっ……」

衝撃で体に力が入らず、クリスタは壁を背に地面に座り込む。

視界がはつきりしない中で、巨人の手が伸ばされるのが分かる。

しかし、クリスタの表情には焦りも恐怖も無かった。

何故なら……

巨人の手が閉じられる瞬間、クリスタは目を瞑るのと同時に浮遊感を感じた。

暖かい何かに包まれる様な感覚に目を開ければ、巨人が下に見え、その手は空を切っていた。

「……ごめん……遅くなった……」

何故なら……

「……信じてたから……」

クリスタが視線をずらせば、心配そうに自分を見つめるトワが居た。

「……トワ……」

「守ってくれてありがとう」

トワはクリスタを抱えたまま近くの屋根に降りる。

「……少し待ってて」

トワは屋根の上にクリスタをゆっくりと寝かせると、ブレードを抜いて迫る巨人に向き直る。

巨人の首元にアンカーを刺し、巻き取ると同時にガスを噴射させ、一瞬の内に肩の上を通り過ぎ背後を取る。

振り向きざまに、アンカーをうなじに刺して巻き取り、巨人のうなじに向けてブレードを振る。

「トワ分隊長！」

巨人を討伐し、クリスタの居る屋根の上に降り立ったトワの元に、同じく巨人を討伐したミカサ達が駆け寄ってくる。

「クリスタは!？」

「……骨折はしてない……けど、体中打撲だらけ……今日は安静にすること。いい?」

「……私も……」緒に……」

「駄目……動かないで」

無理に立ち上がるとうとするクリスタをトワは優しく抱き抱える。

「トワ……」

「後は任せて……私1人で大丈夫だから」

「っ……」

微笑みながら告げるトワの言葉にクリスタは悲しそうな顔を浮かべる。

「……任せてもいい？」

「それはもちろんですが……」

トワから声をかけられたユミルはクリスタの顔を見ながら答える。

「トワ分隊長」

そこに、ミーナに背負われたアルミンが降りてくる。

アルミンはミーナの背中から降りると、トワに作戦を語る。

「あの巨人を……ん、分かった」

普通なら信じられない様な作戦だが、トワは全く迷わずに受け入れる。

「アルミン、これ……」

クリスタは自身の立体機動装置からガスボンベを外すとアルミンに渡す。

「分かった。使わせて貰うよ」

「それなら、私がクリスタを背負うよ。私よりユミルの方が力になると思うし」

「……分かった。クリスタを頼む」

確かに、その方がトワの為に、ひいてはクリスタの為になるだろうと判断したユミルは、抱えていたクリスタをミーナに任せる。

「準備はいい……？」

「いつでも行けます！」

「ん……じゃあ、行く……」

全員の準備が出来たことを確認したトワは、本部へと移動を開始する。

ミカサとユミルもトワの後に続いて立体機動に移る。

「クリスタ、私達も行くよ」

「……うん」

クリスタもミーナに背負われてトワ達の後を追う。

「……………トワの力になりたくて……………努力してきたのに……………何も出来ない……………」

ミーナの背中で、クリスタは巨人を討伐していくトワを見ながら唇を噛み締めた。

「悔しい……………」

『なんだ……………あの動き……………』

『巨人を討伐しながらなのに……………私達は追いつくので精一杯だなんて』

次々と、巨人を討伐しながら進むトワを見て、コニーとミーナが驚く。

『……………無駄が無い……………』

『無駄?』

『理想の動き……………そう言っているけど、1つ1つの動きに無駄が無い。だから、速い……………けど、あんな動き……………巨人の動きを完全に読んでない……………出来ない』

2人の前を進むミカサも、トワの動きに驚きを隠せない。

『超感覚』……………それがトワの力。普段は抑えているけど、『感じ取る』事に特化したその力は未来すら感じ取る」

そんなトワたちの行動を、アウラは精神世界から見ていた。

「だけど……………感じ取る事に特化したその力は、周囲の人の感情や苦痛までも感じ取ってしまう」

トワの力の本質は異常なまでの感受性の高さ。

その強すぎる感受性は、抑えた状態でさえ人の感情を感じ取ってしまうほど。

そして、抑えるのを止めれば、未来を事前に感じ取り、災いを回避できる反面、周囲の感情や苦痛までも感じ取る。

「そして、その感じ取る感情や苦痛には生死は関係無い」

力を開放させた時、トワが感じ取る範囲は、街を半分を覆う程であり、そこに体の一部が僅かにでもあれば、生死は関係無い。

生きていれば、その時の感情や苦痛を、死んでいれば、死んだ時の感情や苦痛を感じ取る。

そして、調査兵団に所属するトワの周囲には死が多く、トワは力を使う度に、怒りや恐怖、憎悪に加え、死ぬ時の痛み等を体感することになる。

「いつそ、心が壊れてしまえば楽になれるのに、強靱な精神力のせいで簡単に壊れることすら出来ない」

遙か遠くまで広がる精神世界は、トワの精神力を表している。

その端は崩れ続けているが、全て崩れるまではかなり時間がかかるだろう。

(調査兵団を辞めて)

(……それは無理)

(……どうして?このままだと貴方の心が壊れるかもしれない)

(それでもいい……例えば心が壊れたとしても……私は私の目的を果たす)

だが、それはこの先ずっと力を抑え続けていた場合。

巨人と戦う度に力を使っていればそう遠く無い未来にトワは心が壊れる。

だから、アウラは巨人と戦う機会の多い調査兵団を辞める様にトワに告げた。

しかし、トワはそれを拒否した。

「未来を変える事は出来ても運命は変えられない。世界の修正力が働く限り、運命は原作通りに進もうと辻褃を合わせ始める」

アウラは辛そうな表情をしながら巨人を討伐していくトワを見て眩いた。

「……未来を変えた弊害は直ぐに現れる」

9話 正解を導く力

「……あと少し……っ……」

順調に奇行種を本部へと誘導していたトワは、本部から500メートル程離れた場所で足を止める。

「トワ分隊長……?」

「……流石に、数が多い」

トワの後ろをついてきていたアルミン達か追いついて来る。

足を止めたトワを不思議に思いながらトワの見る本部へと視線を向けると、大型だけでも20体以上。

中型、小型を含めると50は超えるだろう数の巨人が群がっており、更に周囲から続々と巨人が近づいて来るのが見える。

「……このままだと僕たちがガスを補給する前に本部が崩れる。そうなってしまえば、ガスの補給が出来ない僕たちは終わりだ」

「だったら、早く本部に入って補給しないと!」

「どうやってこの数の中、本部まで辿り着くんだよ」

「それは……」

アルミン達は、巨人によって少しずつ崩れていく本部を見て焦る。

だが、まるで波の様な巨人の群れを掻い潜る術が無い。

「……っ!?アルミン!」

「え? なっ!」

その時、奇行種が叫び声を上げて群がる巨人へと走り出す。

「……! 付いてきて……」

「トワ分隊長!? くっ……僕たちも行くこう!」

その直後にトワは一直線に本部へと飛び出す。

アルミン達はトワの行動に正気を疑うも、本部へと辿り着く為には多数の巨人を掻い潜って行くしか無いと、トワの後を追う。

一列に並ぶ家屋を挟んで、左の道を奇行種が、右の道をトワ達が進む。

「トワ分隊長! 巨人が向かってきます!」

本部に近づくにつれ、トワ達に気づき向かって来る巨人が増える。大半は奇行種に向かって行くが、少なくとも数の巨人がトワ達に迫る。

「……大丈夫……速度、落とさないで……!」

前方から向かって来る巨人の群れに、速度を落としそうになるアルミン達。

トワはそのままの速度を維持して付いてくる様に告げ、1人、速度を上げ向かってくる巨人を討伐していく。

「トワ分隊長!どうするつもり……なっ!」

本部に群がる巨人と先頭を進むトワが直ぐ近くまで近づいた時、トワの目の前を1体の巨人が飛んで行く。

「巨人が……!」

「……今……!」

その巨人は複数の巨人を巻き込みながら転がっていき、それによってトワ達の視線の先には数体の巨人を残すだけになる。

トワはその瞬間を逃さず、ガスを噴射させて巨人に迫り、次々と巨人を討伐していく。

「……後……2体……!」

残った2体は中に気を取られ、無防備にうなじを晒している。

トワは速度を上げ、2体の巨人を討伐すると、巨人が開けた穴の縁に降り立つ。

「は……?」

トワの目の前には突然の事に驚いた表情で固まる訓練兵が1人。

「……」

「……大丈夫……?」

トワはブレードを鞘にしまうと、固まったままの訓練兵に優しく声をかけた。

「普通に考えれば分かる……こんなでけえやつに……勝てるわけがねえことくらい」

ジャンが伸ばされる巨人の手を前に諦めかけたその時。

「は……？」

いきなり2体の巨人が倒れ、巨人に開けられた穴の縁に1人の少女が降り立つ。

「……………」

「……大丈夫……？」

「……っ!?ト、トワ分隊長!?だ、大丈夫です!」

ほんの僅かの間、トワを見惚れていたジャンはトワに話しかけられ正気に戻る。

「ミカサ……!?お、お前……生きてるじゃねえか!」

その時、トワの後に続いていたミカサ達が窓から飛び込んでくる。

死んだと思っていたミカサが生きていた事に、ジャンは驚きつつも嬉しそうに叫ぶ。

「ハアハア……死ぬかと思った」

「ガスもギリギリだよ……」

コニーは息も絶え絶えの様子で座り込む。

他のメンバーもコニー同様に疲労困憊の様子。

「でも……やったよ、アルミン! 作戦は成功だよ!」

それでも作戦の通りに奇行種をここまで連れてくる事に成功し、自分達も本部に辿り着く事が出来た事に、ミーナはアルミンの手を取って喜ぶ。

「作戦って何のこ……」

「アアアアア!!」

「っ!?……ありゃあ……何だ……? 巨人が巨人と戦ってる……だと……?」

巨人の叫び声にジャンが外を見ると、巨人が巨人と戦っている光景。

「……アルミン……あの奇行種だけだと……保たない……私も一緒に時間を稼ぐけど……なるべく急いで……」

戸惑うジャン達を他所に、トワは難しい顔をして状況を確認する。巨人が動く度に幾つもの罅が入る壁に、数の暴力に押され気味の奇行種。

このままだと本部は保たないと判断したトワは、アルミン達がガスを補給する時間を稼ぐため、巨人を引きつけようと窓へ向かう。

「トワ!? 待って! 無茶だよ!」

「……あの奇行種だけだと……守りきれないから……」

トワがクリスタの横を通り過ぎようとした時、トワが何をしようとしているのかを察したクリスタに手を掴まれて引き止められる。

「でも! でも! ……」

「……大丈夫……ね?」

「っ……」

トワは徐々に瞳に涙が溜まっていくクリスタの頭に手を置いて微笑みかける。

「……こっちは……任せた……」

「…………うん」

クリスタがトワの手を離すと、トワは最後に優しく頭を撫でて外へ飛び出していく。

「……っ……」

トワを見送ったクリスタは和がれる涙を手の甲で拭き取ってから振り返る。

「アルミン、急ごう」

「クリスタ……良かったの?」

「良くないよ……トワが無茶するのも、それで傷つくのも嫌だ。でも、トワは誰かの為に傷つく事を厭わない。今だってそう……私達の為に無茶してる。そんなトワに私ができる事は、早くここを脱出して、トワが無茶しなくて済むようにする事だけだから……」

「そっか……クリスタは強いね」

「……え?」

「自分に出来る事をちゃんと分かって、そのために行動できる……僕なんてユミルに怒られるまで何も出来なかったから」

アルミンはユミルに怒られた時の事を思い出す。

エレンを巨人に食べられたショックで、動くことも出来ず、ミーナにまで危険に晒してしまった。

「作戦ももう考えてあるんだ。でも、それが正しいのか分からない……自分に自身が無いんだ。兵士を目指したのもエレンとミカサの後を追ってるだけ。昔から気何も変わってない……何も出来ない……」

「それは違う」

「ミカサ……?」

自分の言葉を否定する声に、アルミンが顔を上げればミカサが立っていた。

その顔は少し怒ったような表情を浮かべている。

「何も出来ないなんて事は無い。私もエレンも、以前はその力に救われた」

「……え?そんなこと……」

「自覚が無いだけ……後で話そう。今は時間がない」

アルミンは伸ばされるミカサの手を掴み立ち上がる。

「大丈夫……自信を持って。アルミンは正解を導く力がある」

「……うん」

アルミンは一度深く息を吐くと、ジャン達に向き直る。

「皆、聞いてくれ!あの巨人は巨人を殺しまくる奇行種だ!しかも僕たちには興味が無い!」

アルミンは状況が理解出来ず、立ち尽くしたままのジャン達に、奇行種を指差しながら告げる。

「あの巨人は並の巨人より強い!上手く利用すればここを脱出出来る!」

「……30分……」

トワはアルミン達がガスを補給して本部から脱出するのに大体30分程度かかると予測する。

その間本部を守りつつ、クリスタ達が脱出しやすい様に巨人の数を減らす必要がある。

「ふう……」

壁を登ろうとする大型の巨人を討伐したトワは一度本部の上に登り、巨人を見下ろす。

「……10……20……30……」

小型から大型を含め、30を越える数の巨人が見える。

更に辺りを見渡し、トワは転がる兵士を探す。

その中でも比較的血が乾いていない兵士は、本部に突撃した者である可能性が高く、ガスは殆ど残っていないだろう。

そのため、トワは血が乾いている兵士の姿を探す。

その兵士は巨人との攻防が始まって早くに負けてしまった筈であり、ガスが残っている可能性が高い。

「ガスは……5つ……」

トワは、3つの兵士に当たりを付ける。

その内の1人は補給兵だったのか近くには2人分のガスボンベが転がっている。

「……私の役目は……本部を崩させないこと……中に巨人を入れないこと……あの奇行種を死なせないこと……」

トワは自分がしなくてはいけない事を確認する。

本部を崩させないことはもちろん、巨人を中に侵入させてしまえばクリスタ達に危険が迫り、奇行種を死なせてしまえば1人で大量の巨人から守りきれなければいけない事になり、それは不可能だと言える。

「……難しいけど……私がやらなくちゃ……それに……」

トワの体が小刻みに震える。

トワでもこの数の巨人に恐怖を覚えたのか？

それが違うことはトワの纏う雰囲気で見分かる。

「私……怒ってるんだ……」

トワは表情にこそ出さないが、目を覚ましてからずっと内心では腸が煮えくり返りそうだった。

クリスタを傷つけた巨人に、何より間に合わなかった自分自身に。周りに人が居れば恐怖の余り逃げ出しそうな程の殺気を纏いトワはアンカーを発射する。

「八つ当たりに……付き合って……」

トワは集まってきた巨人の群れに向かって飛び降りた。

「……………これは……………ひどいな……………」

「こんなにも巨人が侵入してるなんて……………」

トロスト区に辿り着き、壁に登ったリヴァイ達は壁内を見下ろす。

その悲惨な光景にエルドとペトラは顔をしかめる。

「リヴァイ兵長！あれを！」

突然、エムブラが声をあげる。

リヴァイ達がエムブラの指差す方へ視線を向けると、巨人が群がる

本部が見える。

「巨人があんなに……………」

「あそこに人が取り残されてるのか!？」

「早く助けに行かないと！」

ペトロ達が慌てる中、本部の壁を登ろうとする巨人が次々と討伐さ

れて落ちていくのが見える。

「……………どう思う?」

「恐らく考えている事は同じかと」

それを見たリヴァイとエムブラは、そこにトワが居ると考えた。

「お前ら、覚悟はいいな?」

リヴァイはエムブラ達が頷くのを確認すると壁を飛び降り、立体機動に移った。

ハロウイン S S

「明日が何の日か知ってますか!?!」

「サシャ?急にどうしたの?」

1日の訓練が終わり、誰もが疲れた様子で寢床に就こうとしていた時、水を浴びて来たのか髪が濡れたままのサシャが、勢い良く扉を開けて入って来る。

「明日はハロウインですよ!」

「ハロウイン……?ああ、お菓子をくれなきゃイタズラしちゃうぞ?ってやつか。2年前からシエラ商会がやり始めたんだったな」

「そうです!今日は仮装したらお菓子を沢山貰えるらしいです!私達は訓練兵でしたから参加出来なくて、今年を楽しみにしてたんですよ!」

サシャは興奮した様子で話す。

元々、ハロウインと言う文化は無かったのだが、2年前からシエラ商会が子供にお菓子をあげると言う行事を始めた。

どうやら、サシャはその行事にとっても興味があったらしいのだが、訓練兵だったサシャには自由時間が殆ど無く、泣く泣く断念したと言う経緯があった。

「でも、私達は新兵だし、そんな時間無いと思うけど……」

「大丈夫です!エルヴィン団長の許可は貰ってます!」

サシャの熱意に苦笑しつつ、クリスタは質問する。

クリスタの間に、サシャは待ってましたと言わんばかりの表情で、エルヴィンから許可を貰っている事を告げる。

「いつの間に……」

「実は今日の内に、ハンジ分隊長に話をしてエルヴィン団長の許可を取って貰ったんです」

「なら、いい機会だしやってみるか!この先、いつやれるか分からねえしな」

「そうこなくて!皆にも話してきますね!」

「ほんとにいいのかなあ……」

盛り上がる2人を見ながら、クリスタは不安そうに呟く。

「クリスタはトワ分隊長の仮装……見たくないんですか？」

「え……？」

サシヤの言葉にクリスタの心が揺らぐ。

「そーいや、初回だけトワ分隊長も仮装したんだったな。宣伝の為だとかで。凄い盛り上がったみたいだぞ」

クリスタの仮装を見たいユミルも嬉々として話に乗った。

「み、見たい……」

「ん？どうした、クリスタ？」

「私も見たい！」

「じゃあ、話は決まりですね！ミカサ達も誘いましょう！」

クリスタも参加する事が決まった所で、サシヤはミカサ達も誘うために部屋を出て行った。

「話って……？」

何時ものように訓練に明け暮れていたトワは、急にやって来たハンジに担がれてエルヴィンの元に連れて行かれていた。

トワの前にはエルヴィンにリヴァイ、そして分隊長達が集まっていた。

「ハロウインをやるうと思う」

「……は……？」

「私達も仮想をして新兵達にお菓子を配るんだよ」

突然の事にトワは疑問符を浮かべたまま固まる。

「私達はいつ死ぬか分からないからね。だから、こういう事はやっておくべきだと思うんだ」

「新兵達と交流の場とするには相応しいと判断した」

「リヴァイ……」

トワは1人離れて壁に寄りかかっているリヴァイに視線を向ける。

「エルヴィンの指示だ。従え」

「……衣装は……」

「ちゃんとエレノアちゃんから借りてるよ」

逃げ場の無くなったトワは、面倒くさそうに顔を顰める。

「私は……いい……」

「クリスタの妄想、見たくないの？」

「っ……」

しかし、ハンジの言葉でトワの心が動く。

ニヤニヤするハンジから視線を逸らし、トワはクリスタの妄想した姿を想像する。

「……………分かった」

「よし、決まりだね！新兵にはエルヴィンが用意するから、皆は部下の子たちに配るお菓子を用意しといてよ！」

「うわあ〜！クリスタ、可愛いですよお!!」

「これは、男を近づける訳にはいかねえな」

「ちよ、ちよつと、恥ずかしいから……」

ハロウィン当日。

クリスタは黒いワンピースに、頭に角をつけて腰に取り外し可能な羽が付いた、所謂小悪魔の仮装をしていた。

「サシヤは狼女で、ユミルは……」

「幽霊だ」

サシヤは腰に尻尾を付け、犬耳ノ付いたフードを被り、ユミルは白い服に上から白いフードを被った幽霊の仮装をしていた。

「そう言えば、私達は何もしくないの？」

ハロウィンはお菓子が必要なのではと、クリスタがふと疑問に思う。

「大丈夫ですよ。お菓子とかはエルヴィン団長達がやってくれますか

ら」

「そうなの？」

「はい。なので私達はハロウィンが始まる夕方まで何もすること無いんですよ。だから、外に遊びに行きましょう！無料でお菓子を配ってる所も多いんですよ！」

クリスタは直ぐに食べ物の話になるサシヤに、苦笑しつつ、それも楽しそうだなあと思う。

「ほら、時間が無いんですから急ぎましょう！」

トワ達はハロウィンの会場として使う場所の準備を進めていた。

「……何で……この服……」

「何と言っても『銀聖女』だからね」

少し不満そうなトワの服は所謂修女服と呼ばれるものだが、その丈は短くなっていてデザインも可愛らしく作られている。

「ハンジは……魔女で、リヴァイは……何？」

「死神だ」

「……まあ……確かに、似合う……」

ハンジは魔女、リヴァイは死神の仮装をしており、堂に入っていた。「ちなみに、エルヴィンは吸血鬼だって」

ハンジの指差す場所を見て、トワは直ぐに目を背ける。

後日、「一番……はしゃいでた……」とトワは語った。

「ハッピーハロウィン!!」

ハンジの掛け声と共に、調査兵団のハロウィンが開始される。

衣装の枚数の都合上、今回仮装しているのは新兵とエルヴィン達幹

部のみ。

他の兵士たちは何時もの戦闘服で参加していた。

「やべえ……破壊力が、やべえ」

まるで語彙力が無くなったかの様に話す兵士だが、誰もが同じ事を思っていた。

何時もより何倍も露出が多いトワの姿に、男達は目を奪われる。

「……かわいい……」

そして、それはクリスタも同じ。

クリスタは熱に浮かされた様にトワを見つめていた。

「クリスタ？」

「……………」

「クリスタ？」

「……え!?ど、どうかした？」

「いえ。トワ分隊長の所に行かなくてもいいんですか？」

クリスタはトワと過ごすと思っていたサシヤは不思議そうに質問する。

「うん、後で会う約束してるから。トワは忙しいみたいで時間が取れないから、みんなと過ごしたらって」

「後で会うって事は、夜遅くなるな。そんな時間に何するんだか」

「べ、べつに何もしないよ!!」

「ほんとかなあ？」

「ほんとだから!!」

夜遅くと言う事に、ユミルがニヤニヤしながらクリスタを見た。

ユミルの顔を見て、何を考えているか察したクリスタは顔を真っ赤にして否定する。

「……?何の話かは分かりませんが、早く食べないと無くなっちゃいますよ?」

そんな2人の様子に首を傾げながら、サシヤは口一杯お菓子を詰め
て幸せそうだった。

「ほんとに、かわいい……!!」

「……それは、私の台詞……」

調査兵団で開催されたハロウィンも終わり、みんなが部屋で今日の事を話し合っているなか、クリスタは、トワに呼ばれて部屋を訪れていた。

トワとクリスタはお互いの仮装を見て、盛り上がっている。

「そうだ！トリック・オア・トリート。お菓子くれなきやイタズラしちゃうぞ?」

今日の出来事を話しながら、時間を過ごしていると、クリスタがふと思い出した様にハロウィンの代名詞である言葉をトワに投げかける。

「……イタズラ……する……?」

「……もう!」

顔を紅くするクリスタに、トワは微笑みながらお菓子を渡す。

「あれ?これ……」

それはトワが皆に配った市販品のお菓子ではなかった。

「……買ってきたのもある……から」

「ううん!これがいい!」

トワの手作りのお菓子は、クリスタは自然と笑みが浮かぶ。

「美味しい……」

お菓子を1つ取り出し、大切に口に運ぶ。

本当に幸せそうに食べるクリスタを見てトワは少しイタズラ心が浮かぶ。

「……お菓子くれなきや……イタズラしちゃう、ぞ?」

「え……?わ、私、何も準備してなくて……その……」

何も準備しなくていいと聞いていたクリスタは、突然の事に戸惑う。

「じゃあ、イタズラ……しない?……ね?」

イタズラっぽい笑みを浮かべるトワ。

クリスタの頬に手を置いて、ゆっくりと顔を近づけていき……

「ト、トワ? まっ……………」

「悪い小悪魔は……………聖女の私が……………やっつけないかね……………?」
そのまま、慌てるクリスタの口を塞いだ。

次の日、クリスタの様子を見て察したユミルによって、クリスタが
1日中顔を真っ赤にしていたのはまた、別の話。

10話 心に潜む者

「……次……」

トワは壁を登ろうとする大型の巨人を次々と討伐していく。それによって、扉から中に入ろうとする小型の巨人は落ちてくる大型の巨人に踏み潰される。

「……次……」

西、東と、トワは速度を落とすことなく、巨人を討伐しながら本部周囲を飛び回る。

「……ん……これも、交換……」

討伐した大型巨人の体で扉を塞げていることを確認したトワは、少なくなつたガスとボロボロのブレードを交換するために一度本部へと登った。

「……強い。……あの格闘技……まるで、人間みたい……」

集めておいたガスボンベを拾い、自分の物と交換しながら、トワは奇行種が暴れる南側を見る。

次々と向かってくる巨人を殴り飛ばし、踏みつけ、投げる。

その動きはまるで訓練を受けた兵士の様で、並の巨人とは一線を画す。

精鋭と呼ばれる調査兵团でも、一部を除けば戦いにすらならない程の戦闘力を持っているだろう。

このまま生かしておいていいのか。

「……考えるのは……私の役目じゃ、無い……。敵じゃないなら……別にいい……」

一瞬、そんな考えが頭を過るが、直ぐに考えることを止める。

『まだ』敵じゃないなら、今はいい。

どの道、現状はこの奇行種が居ないと、1人では全てを守りきれない。

「……すう……ふう……」

トワは大きく深呼吸をして乱れた呼吸を整え、再び集中力を高め

る。

体力も限界に近いが、体はまだ動く。

ガスの交換を終えたトワは、ふらつきながらもブレードを杖に立ち上がる。

「……後、少し……」

そう呟くトワの目は、巨人の後ろ……外門を見据えていた。

「……みんな、大丈夫だ。落ち着いてやれば必ず成功する」

アルミン達はリフトに乗って、巨人が占拠する部屋に向かっていった。

恐怖からか震える同期を、一緒に乗っていたマルコが励ます。

「もう少しで巨人の元に到着する。その前にもう一度作戦を話しておくよ。僕達の役目は巨人を引き付け、この銃で視界を奪うことだ。そうすれば、後は既に待機しているミカサ達が巨人を仕留めてくれる」
今回の作戦の要である巨人を討伐する役目を担うのは、ミカサ、ライナー、ベルトルト、アニ、ジャン、コニー、サシャ、クリスタの成績上位者と、本来であればその中でも上位に入っていたであろう実力を持つユミルの9人。

同じく成績上位者のマルコは、その指揮能力の高さから囃班に回り、作戦開始の合図を出す。

「作戦が成功したら、直ぐにガスボンベをこのリフトに載せて2階に上がる」

現在のアルミン達は立体機動装置を身に着けていない。

ガスが無くて使えない、ただ重いだけの立体機動装置は動くのに邪魔だからだ。

そのため、ガスボンベを立体機動装置を置いてある2階まで運ぶ必要がある。

「新たに巨人が侵入してくる可能性もある。待機組と協力して迅速に

運んで欲しい」

今回の作戦でリフトの大きさ上、乗れなかった者も出てくる。

囚班にはなるべく銃の扱いが上手い者に入ってもらい、その他の者は階段に待機してもらっている。

「そろそろ着く。……みんな、構えて……」

巨人のいる部屋の直ぐそこまで来たマルコは、声を落として銃を構える様に告げる。

マルコの指示通り、アルミン達は2列に並び、全方位に銃を構える。

「まだだ……まだ……」

リフトに乗って、部屋の中央に降りてきたアルミン達に気づいた巨人が一步ずつゆっくりと近づいていく。

「まだ……」

「はあ……はあ……」

もはや誰のものか分からない息遣いが大きくなっていく。

そして、遂に巨人が目と鼻の先に迫る。

「撃て!!」

マルコの号令と共に、銃の発砲音がけたたましく鳴り響いた。

クリスタはミカサ達と共に、鉄骨の上に隠れて時を待っていた。

下を見れば、小型の巨人が徘徊している。

「はあ、はあ……」

恐怖で息は荒くなり、体は震える。

クリスタは目を瞑る。

思い返すのはトワの事。

1人にさせないと、隣に立つと誓った。

そのために、3年間もの間必死になって努力してきた。

だけど、足りなかった。

トワの隣に立つどころか、後ろで守って貰うことしか出来ない。

トワとの実力差は嫌という程思い知らされた。
この先いくら努力しても届かないかもしれない。

でも、だからと言ってトワの隣に立つ事を諦めることは出来ない。
「だから、この程度の事で怖気付いてる暇は無いだ」

クリスタはブレードを力強く握りしめ、大きく息を吐いた。

「来た」

その時、音をたててリフトが降りてくる。

その音に気づいたのか、巨人が中央のリフトに向けて近づいていく。

「まだ……」

クリスタは何時でも走り出せるように構える。

「まだ……まだ……」

息が荒くなり、心臓の音が激しくなる。

緊張が高まっていくのが分かる。

「撃て!!」

「今っ!」

マルコの声と共に、銃弾が放たれ真っ直ぐ巨人の目に目掛けて飛んでいき、その視界を奪う。

同時に、クリスタは鉄骨を駆け、視界を奪われ、無防備にうなじを晒している巨人に向けて飛びかかる。

「やあああ!!」

仕留め損なえば『死』。

死にたくないなら、誰も死なせたくないなら……この一撃で決めるしか無い。

クリスタは叫びながら力の限りブレードを振るう。

「……皆は!!」

うなじを削ぎ落とし、床に着地したクリスタは、直ぐに周りを見渡す。

前のライナーやベルトルト達は巨人を討伐しているし、左隣のアニの足元にも巨人が倒れている。

「サシャとコニーだ!」

ホツと息を吐きそうになったその時、マルコの声が響く。
振り向くと、サシヤとコニーが担当した巨人が倒れること無く立つていた。

「援護、急げ!!」

2体の巨人が振り向き、サシヤとコニーにそれぞれ迫る。
それを見て、クリスタは弾かれた様に動き出す。

「コニー、避けてー!」

「うおおお!!」

クリスタは近いコニーの元に向かうと、背中を向けていた巨人の足の腱を断ち切る。

バランスを崩して倒れてくる巨人をコニーは慌てて避ける。

「アニー!お願い!」

クリスタは叫ぶ。

確証は無かった。

それでもアニなら必ず来ると信じていた。

アニがクリスタの横を通り過ぎ、倒れる巨人の背中を駆け上がってうなじを削ぎ落とす。

「……よく、私に来てるって分かったね」

「確証は無かったけど、アニなら来るって信じてたから」

「……そう」

直ぐ横でも巨人が倒れる音が響く。

見れば、倒れている巨人の横で、サシヤが涙を流しながらミカサとユミルに縋りついていた。

「良かった……みんな無事で……」

クリスタは誰も死なずに済んだ事に安堵して今度こそホツと息を吐いた。

「はぁ、はぁ……」

アルミン達がリフトを使って移動していた時、トワは本部頂上で激

しく息を切らせながら膝をついていた。

「……血が……」

ふと鼻から液体が流れる感覚に、手の甲で拭えば、そこには真っ赤な血が付着していた。

「……限界、か……」

流れ続ける血は地面に真っ赤な水溜りを作っていく。

長時間に及ぶ戦闘による疲労に、出血による血の減少が加わり、トワは視界がぼやけていく。

「ガアアアアアア!!」

「っ!」

そのまま意識を飛ばしそうになったトワだったが、奇行種の叫び声にハッとして舌を噛み切る。

痛みによって意識を覚醒させたトワの視界に映るのは、巨人に群がられ、抵抗出来ずにその体を貪られていく奇行種の姿と、壁をよじ登り、トワに向けて手を伸ばす巨人の姿。

「くっ!」

トワは即座に立体機動に移り、その手を躲すと背後に回り込んでうなじを削ぐ。

そのまま、討伐した巨人の背中を蹴り、奇行種に群がる巨人へとアンカーを放つ。

「……させ、ない……!」

今まさに、奇行種のようなじへと噛みつきこうとしていた巨人を討伐し、続けざまに群がっていた巨人を片付ける。

更に集まってくる巨人に、トワは奇行種を足場にしようとしてその肩に降りた。

「っ!」

その瞬間、ゾクリと悪寒がトワの体を悪寒が走る。

まるで体の中で、何かが目覚めたかの様な感覚に、トワは奇行種から飛び退き本部へと移る。

「今のは……っ!」

頂上に登ろうと飛んでいたトワだったが、突如、体に力が入らなく

なり、壁に空いた穴へと落下していく。

「かはっ……」

立体機動装置を操作することも出来ずに、トワは勢い良く床に打ち付けられ、肺から息が漏れる。

「この感覚……あの時の……!?!」

体の奥から溢れ出てくる底なしの憎悪に、トワは胸を抑えて蹲る。

「あがっ……ぐぎっ……」

感情を感じ取れると言う超感覚の性質上、トワは普段から感情を『理解』しても『共感』しなくて済むように、強靱な精神力で自身の感情を制御している。

クリスタの事で少し制御が緩んだが、それでもちよつとやそつとの事では共感はない程、トワの精神力は人並み外れていた。

しかし、そんなトワでも抑えきれない憎悪がトワを襲う。

それは、徐々にトワの感情を侵食していき……

「……殺す……っ!?!」

トワの思考さえも塗りつぶしていく。

「あ、アアアアアアアア!!」

トワを侵食する憎悪と、それを抑えようとするトワの理性がぶつかり、激しい痛みがトワの心を壊していく。

そして、それは限界ギリギリで、精神力だけで動いていたトワの体に追い打ちを掛けた。

「あ、ああ……」

限界を超えたトワの体は無理やりトワの意識を刈り取る。

「トワ!!」

薄れていく意識の中、トワは自分の名前を呼ぶ声を聞き、そして

……

「……触るな」

自分の声なのに酷く冷え切り、まるで自分の声じゃないと錯覚させる程の憎悪が籠もった声が口から出るのを耳にした。